春の幻

加藤武雄

KH249-H338
1200500712760

春の幻

加藤武雄

春の幻

加藤武雄

序

「春の幻」は、雜誌「令女界」のために書ける小さき物語。少年少女のそこはかとなき戀ごころを綴りて、美しき夢のあまりに覺めやすきを嘆くのおもひを寫したり。「江戸著聞集」に見えたるお七吉三の實說に據りて書ける「幻を抱きて」は、「影」と共に、或る婦人雜誌の需に應じて寄せたるもの也。

KH249-H338

國立國會圖書館藏書

I種
W

1200500712760

春の幻 目次

□春の幻……一
□影……一二九
□幻を抱いて……一五九

お七
八百

お七

春の幻

一　妻といふもの

咲子は二階の六疊の机の前に坐つて、暫らくぼんやりとしてゐたが、ふと、そこにあつた××界をとりあげて、その中の續きものらしい小説を、眼に觸れたまゝに、讀むともなしに讀んでゆくうち、ついつりこまれて、もう一頁もう一頁と讀み進んで行つた。

『おや、お前、本を讀んでおいでなのかい？』

何時の間にか、階下からあがつて來た母が、障子の間からにこやかな笑顔を見せたが、少し言ひ澁るやうな、遠慮つぽい調子で、

『もう四時近くなりましたよ。そろ〱、歸らなければいけまいがね。』

『あら、もうそんな時間なの？――』と咲子は本を擱いてゐずまひを直して母の方を振返つて見ながら、何とはなしに淋しく笑つて見せた。

母は座敷へはひつて來て、細目に明いてゐた窓の障子から、一寸空をのぞいて見て、「

『すつかり曇つたね。ぽつ〳〵と來るかも知れない、俥を言はうかね？』

『いゝえ、電車で結構――。私、一寸房ちやんに逢つて歸りたいんですけれど。』

『ほんとに、生憎だつたね。房子もあとで殘念がることだらうよ――。どうして、また、今日はこんなに遲いんだらう。いつも、三時半にはきつと歸るんだのに。』

『お友だちのところへでも寄つてゐるんでせう？』

『この頃はちよい〳〵かういふ事があるんだよ。』と、母は心配さうに眉をひそめて、『私は、悪いお友達でも出來てるんぢやないかと、心配してゐるんだよ、この頃ぢや、日曜だつて、家に落着いてゐる事は滅多にないんだからね、やれ、音樂の會だとか、歌の會だとか、さうかと思へば、ペコニックとか何とかかつて、お辨當をもつて出かけたりして――』

『あら、お母樣、ペコニックて何のこと？』と咲子は思はず噴き出しながら言つた。

『何の事かと思つたら、遊山のことださうだよ。この頃の若い者は、むやみに英語をつかふので私なんか、話が面倒で困るんだよ。』

『お母樣、それはピクニックつていふのよ　ペコニックなんてをかしいわ。』と咲子はたうとう聲をあげて笑つてしまつた。

『あゝ、さうかい？』と母もをかしさうに笑つたが、再び物思はしげな顏附になつて、

『まあ、下へ降りてお茶でもお上り。そしてそろ〳〵歸りの仕度をしなきや――』と言ひ捨てゝ階下に降りて行つた。

咲子は、しかし、机の上に肘をついて、又ぼんやりと、考へ込んで了つた。

今、妹の房子の部屋になつてゐるこの六疊は、つい、四月ほど前までは、咲子の部屋になつてゐた。机でも、本箱でも、本箱の上の花瓶でも、刺繡の柱かけでも、壁にとめた、いろ〳〵の繪でも、皆、前のまゝであつた。さうして机の前に坐つてゐると、安らかな處女の日の落着いた氣分が、咲子の心に蘇つて來るのであつた。この小さな部屋を世界にして、いろ〳〵の夢を夢みながら明かし暮した、處女の日！　あゝ、その時分の月日はいかに樂しく、輝かしく、そして安らかであつたらう？　咲子は今の心持を、その時分の心持に思ひくらべて見て、妙に悲しい味氣

ない氣がして來たのであつた。

『さあ、咲子、お茶がはひりましたよ。もう出かけないと遲くなるから。』

再び階下から、あがつて來た母は、梯子段の上り口のところから、襖越しにかう聲をかけた。

『今まゐりますよ。』

『ぢや、すぐにね。』

とんとんと、梯子を降りてゆく母の跫音をきゝながら、咲子は力なさゝうに立ちあがつたが、ふと、氣がついたやうに窓の下の鏡臺の前に行つて、鬢のほつれを搔きあげた。その鏡に映る赤い手絡の丸髷姿を見ると、咲子は何だか自分が自分でないやうな不思議な氣もちがした。そしてその眉のあたりに漂うてゐる暗い影と、ひどく青ざめた顏色とが、思ひの外に心の愁を濃く見せてゐるのに、自分ながら驚かれるのであつた。今日、母が、顏を見るなり『お前どこか身體が惡いのぢやないかい？』と心配さうに問ひかけたが、本當にまるでこれでは病人のやうだと、咲子は悲しい心持で、ぢつと鏡の裏の自分を打戍つた。『いゝえ何處も惡い事はなくてよ。』と答へると

母は、やさしく微笑しながら、『出來たのではないかえ？』と言つたが——そして、その時は一も二もなく打消したがひよつとしたら矢張さうかも知れないと思ふと、咲子はおのづから顏の熱くなるのを感じた。が、すぐにまた、何かとりかへしのつかない事をして了つたやうな、妙に重苦しい氣持が黑い雲のやうに胸一ぱひにみなぎつて來るのであつた。

鏡の前に立つた咲子はもう一度、机の前に行つて、ひきだしの中から桃色の、レターペーパアを探し出すとペンをとりあげて、走り書きに房子への置き手紙を書いた。

『房子さん、今日一寸歸つて見たけれど、あんたが居なくて本當につまらなかつたわ。四時頃までお待ちしましたけれど、もう時間が來たから歸らなければなりません。私は、私の、あの暗い冷たい寄宿舍へかへらなければなりません。時間がおくれると、やかましい舍監さんに叱られますもの。けふは、この部屋であんたを待ちながら、一時間もぼんやりと考へ込んでしまつたの。昔のことなどいろ〳〵と考へると、何だか悲しくなつて、泣きたくなつてしまひました。本當にお嫁なんぞ行くものぢやないと、つく〴〵思ひますわ。私、いつまで

もいつまでも娘で居たかつたわ。私はしみ〴〵と房子さんをうらやましいと思ひます…』

そんな風に書いてゐるうちに、咲子はおのづから、胸がせまつて來て、涙が瞼一ぱいになつて來た。

『咲子、何をしておいでなのさ。』と下からまた母の呼ぶ聲がした。

『はい、唯今。』

手早く手紙を封じて、《房子さんへ――》と表書に書いて、机の上にのせて置いて、咲子は階下に降りて行つた。

日射しの惡い八疊の茶の間は、もううすぐらい夕影をたゞよはしてゐた。長火鉢の向ふに、ちんとすわつた母は、左の手で猫板の上に艶布巾をかけながら、

『さ、まあ、お茶一つ。さうしてあまり遲くならないうちに出かけた方がいゝよ。』

『私、何だかもう歸るのがいやになつてしまつたわ。』咲子は、その火鉢の此方側にべつたりとくづれるやうに坐つて、甘へるやうな調子でかう言つた。

『そんな事を言つたつて、お前。』と淋しく笑ひながら、母は一度淹れた茶を、もう一度淹れかへたりして、

『これはね、圭次郎がこの間京都から土産に買つて來たんだよ。一つあがつて御覽。』と菓子盆の蓋を取つた。

『圭さん、お變りなくつて？』

『あゝ、近頃ぢやまじめに精出してゐるやうだよ。お店の方の信用もやうやくとりかへせた、なんて、この間來た時笑つてたつけ。——本當にあれも一時はどうなることかと思つたがね。』

『ちよい／＼來るの？』

『あゝ、近頃はよく來るよ。あれも心持はいゝものだよ。淋しいせゐもあるだらうけれど、近頃はひどく私をなつかしがつてね。』母は口の中で言葉を練つて、それから徐にそれを手繰り出すといふやうな話振でこんなことをはなした。

圭次郎といふのは、咲子の從兄に當る若者だつた。早く兩親に死に別れて、小さい時から、咲

子の家で、彼女等と一緒に育てられて、兄弟も同様隔てのない仲であつたが、どういふものか、圭次郎は學問が嫌ひで、中學も途中で退いて、自分から進んで、銀座の方の洋物店に住み込んだりして、商業の方に身を入れてゐた。頭髮を美しく光らせて角帶に金鎖などをからませて、前垂掛に雪駄穿きといふ姿でやつて來ては、咲子達を相手に賑やかに語り興じたりしたが、咲子は、圭次郎が並々ならず自分を愛して呉れるのを知りながら、どうも圭次郎を好く氣にはなれなかつた。いや決して、嫌ひだといふのではなかつたけれども言ふ事にもする事にも、ちつとも高尚な處もない下品な男のやうに思はれて、輕い侮蔑を感じないでは居られなかつた。『おれは學問なんか駄目だけど、その代り金を儲けるぜ。まあ、見ておいで、咲ちやん、もう二三年するうちにや立派な成金になつて見せるから。』などと、圭次郎が言ふと、咲子は、『成金なんていやね、私お金なんて些とも欲しいとは思はない。』と、頭から叩きつけるやうに言つたものだつた。圭次郎は、仕方なしに苦笑しながら、『駄目だなあ。咲ちやんなぞ苦勞して見ないから。』などと言つてゐたが圭次郎はその時分からちよい〳〵株の方などに手を出して、不相應の大金を儲けたりするらしか

つた、そして、驚くほど高價な指輪などを持つて來ては、『咲ちやん、あげよう！』と、無雜作に咲子の前に抛り出したりした。

咲子の縁談がきまつた時分から、圭次郎は盛んによくない遊びをはじめて、つひには店の金をまで持ち出したりしたゝめ、店の方をもしくじつてしまひ、大阪の方へ逃げて行つたりしたが、圭次郎のさういふ狂態と、咲子の結婚との間に何等かの關係のある事は、お互にそれと口には出さなかつたが、母にも咲子にもよく判つてゐた。殊に咲子は何人にも言つた事はなかつたが、嫁入前一週間ばかりの或る日買物に出た途で圭次郎につかまつて、さん〴〵恨みを言はれた事があつた。『そりや、僕は何も言はなかつたけれども、僕の心持が咲ちやんにだつてをばさんにだつて判らないつて法はない！　僕はもう何もかもいやになつた。これからはもう無茶苦茶だ！』などと、その時少し醉つてゐた圭次郎は、喰ひ入るやうな眼を咲子の横顔に投げつけて、喘ぐやうな調子でそんな棄鉢なことを言つたが、咲子は、唯、うす氣味わるく、思つただけで、その痛切な戀の告白にも、別だん、心を動かす氣はしなかつた。『だつて、圭さん、そんなことを言つたつて

――』と冷たく言ひすてゝ、逃げるやうに家に歸つたが、それきりまだ咲子は、一度も圭次郎には逢つてゐないのであつた。今となつて見ると、何だかひどく圭次郎にすまない事をしたやうな氣がすると共に、本當に自分を愛して呉れたあの從兄の愛が今はじめてしみ〴〵と、思ひ返される樣な氣がするのであつた。

『あの人も、早くお嫁さんをお貰ひになるといゝわね。』と、咲子は、ふと、とつつけたやうにこんな事を言つた。

『あゝ自分でもそんな事を言つてたよ。ひとりでゐると、どうも落着かなくて困るからなんて。あれで、なか〳〵じみちな考へを持つてゐる男だよ。』

『ね、お母さん、房子ちやんはどうなの？　房うちやんのお婿さんになつて貰ふといゝと私思ふんですけど。』

『さあ。』と、母は銀の煙管の先で鐵瓶の下の火をつゝきながら、

『さうもいくまいよ。そりやあ、圭次郎は承知するかも知れないが、房子もあれでなか〳〵やか

ましやだからね。あれは一生お嫁には行かないなんて言つてゐるんだからね。』

『本當に一生獨で、好きな事をして暮すのもいゝわね、お嫁なんぞ、私もう懲り〳〵――』と言つて、咲子は母の顏を見ながら淋しく笑つたのであつた。

咲子は、憂欝な物思ひに耽りながら、電車の片隅にうなだれてゐた。暗い冷たい、到るところの隅々にあの、意地惡い姑の白い眼がちらついてゐるやうな家に歸つて、息づまるやうな窮窟なそして、全身の神經を一瞬の弛みもなく緊張させてゐなければならないやうな不安な空氣の中へはひつて行かなければならないかと思ふと、一方歸りのおくれたのに心急きながらも、一方では電車の進みを呪ひたいやうな氣さへするのであつた。

Ｓ橋の停留場は、丁度今、潮時なので、洋傘や、蛇の目や、乘換客の群で混み合つてゐた。咲子はその人込からすこし離れた處に、しよんぼりと佇んで、吹沫を含んだ生ぬるい風に片頰を吹かせて、白く眼前を掠める雨脚をぢつと見つめてゐた。雨は大分強くなつて來た。そして、遠く近くの躁音が、薄ねずみ色に昏れかゝる夕を罩めて黄色い灯かげがぽつり〳〵と彼方此方に浮び

出してゐた。

『姉さん!』

ふいにから呼びかけられて、驚いて振返つて見ると、思ひがけなくもそれは房子だつた。今停まつたM行きの電車から降りたらしい房子は、傘もなしに、降りかゝる雨に袖をかざすやうにしながら、小走りに走り寄つて來た。

『どうも姉さんらしいと思つたのよ、で、私降りちやつたの。』房子は、懐かしさうに姉の顔を見上げながら、せか〳〵と息忙しく言つた。

『さう? 私、久し振で今日Kの、お宅に歸つたの、私、房うちやんに一目逢つて歸らうと思つて、ずゐ分待つたのよ。』

『あら、ぢや私早く歸ればよかつた。ついお友達に引きとめられちやつて――』と房子は殘念さうに、すまなさゝうに言ふのであつた。

房子は、姉より二つ下の、十七歳で、濠側のM女學校の三年生だつた。姉に似た細面の色の白

い、眼のすゞしい引きしまつた唇のあたりに理智的な閃きを見せた。たとへば白い桔梗の花のやうなすつきりとした清楚な感じのする少女で、茶ッぽい銘仙に對の羽織、紫のカシミヤの袴といふ極めて質素な服裝だつた。手には學用品を入れた提鞄を提げてゐた。

『もう少し待つてゐればよかつたのね。でもあまりおそくなるもんですから。』

『いゝえ、私が早く歸ればよかつたの。本當に殘念だわ。もう一度、引返してはいけないこと―』

『でも、遲くなるんですもの。今歸つても、もう遲くなり過ぎてゐるのよ。』と、咲子は悲しさうに言つた。

『さう?』と房子も悲しさうに、そして本意無ささうに言つた。」

その時、二度目のM行きが來て停まつた。それから吐き出された人達が、算を亂しながら彼女等の立つてゐるS行き停留場の方へやつて來た。ふと眼を上げた咲子は、その中に義弟の俊彦の姿を見つけた。そして咲子が、思はず、

『俊さん!』と聲をかけようとした時は、俊彦の方でも、義姉の姿を見つけたらしく、にこ〳〵

と笑ひながら、此方へ走つて來た。

が、俊彦の眼が、一つ傘の下に、義姉に寄り添うて立つてゐる房子の姿を捕へると、俊彦の顔には、ある躊躇と當惑との表情が見られた。にこ〳〵とした笑ひが次第に消えて、その淺黑い頰のあたりにほのかな赤味がさして來た。

『俊さん、今、おかへり。』咲子が言つた。

『え〻。姉さんも今？』

『え〻。』と、咲子はうなづいたが、ふと氣がついたやうに、房子を顧みて、

『房うちやん、此方が、俊彦さんよ。』更に、その眼を、俊彦の方にやつて『俊さん、これは私の妹ですの。』

咲子は、かう言つて無雜作に引きあはせたが、二人の少年と少女とは、お互に顔を眞赤にした。眞赤になりながら、ちよいと頭を下げて、簡單な初對面の挨拶をした。

咲子は、二人の初々しい樣子を、笑ましげな眼で見てゐた。

その時、雨が横にしぶいた。

『あら！』と思はず聲を立てながら、房子は咲子に寄り添うた。すると、俊彦はだしぬけに、自分の傘を房子の方に出した。そして、ぶッきらぼうな調子で言つた。

『これ、貸てあげませう！』

二　黄昏の雨

『俊彦さん。今日は何處へお寄りなすつたの？』

咲子は、俊彦と肩を並べてあるきながら、斯う問ひかけた。

『M——のグラウンドへボールを見に行かうと思つたんですけど、雨が降り出したから止めたんです。止めて、駿河臺の友達の許で遊んでゐたんです。』俊彦は、遠慮つぽい調子で言つた、漸く少年期を了らうとしつ〻あるこのセンシブルな少年は、若い美しい義姉の前でいつもするやうにぽつと頰を染めて、おど〳〵と落着のない樣子をしてゐた。

『ボールつて、面白いものですの？』

十歩ばかりの沈默の後に、咲子はふと思ひ出したやうに訊いた。

『え〻、面白いんです。』

『もう、試驗が始まるんでせう。』

『え〻、もう始まつてゐるんです。』

『まあ、試驗が始まつてゐるのに、俊彦さんも呑氣ねえ。』と、咲子は一寸なじるやうな調子で言つた。夫をさへ夫として意識しきれずにゐる咲子も、この義弟には、肉親のやうな愛情が感ぜられるので、俊彦に對してはいかにも姉らしい寬いだ調子で話しかける事が出來るのであつた。

『でも、大丈夫です。』

『さうね、俊彦さんなんか、よくお出來になるから大丈夫だけわね。特待生なんですものね。』

電車を降りる頃から、丁度うまい工合に止んでゐた雨が、又、一としきりさあッと降つて來た。

『また、降つて來てよ。俊彦さん、此方へおはいりなさいな。』咲子は濃い紫の蛇の目を擴げて、

俊彦にその傘を分けようとしたが、俊彦は、マントの袖を合せるやうにして、かぶりを振つた。

『い〻え、僕あい〻です。』

『だつて、濡れるといけませんわ。』

『い〻え、い〻んです！』

『宜かないわ。あなたの傘を、房子に貸して下すつたんですもの。あなたを濡らしちや私すみませんわ。』咲子は、強て自分の傘に、俊彦を入れるやうにした。俊彦は、いかにも困つたといふ樣子で、肩をすぼめるやうにし、默つて足もとを見つめながら歩いてゐたが、しばらくの沈默の後にふと、

『ねえさん！』と呼びかけた。

『何ですの？』

『義姉さんも虎の門なんですね。』さう言つた時、俊彦の顏のあかくなつたのを咲子は見た。俊彦が、義姉さんもと言つたのは、先刻S——の停留場で會つた房子が、虎の門の女學校に通つてゐ

るのだといふ事を知つてゐたからであつた。

『えゝ、虎の門よ。』咲子は一寸言葉を切つて、微笑しながら『虎の門はお轉婆なのよ。』

『でも――』と、俊彦は何か言ひたさうに口を噤んだ。咲子は、俊彦の、いいいすんなりと伸びた肩の線や、女のやうに白いきやしやな襟脚などに眼をやりながら、

『でも――？　何なの？』

『でも、義姉さんは些ともお轉婆ぢやない。』と、俊彦ははにかみながら言つた。

『あら、これでも昔は隨分お轉婆だつたのよ。級中でも、屈指のお轉婆だつたの。』咲子ははづんだ調子でから言つて、聲を立てゝ笑つた。俊彦も、義姉の顏を振仰いで微笑しながらそのきれいに澄んだ黑い眼は、『それはうそです。』と言つてゐた。

『俊彦さん。』と、再びしばらくの沈默の後に、咲子は問ひかけた。『俊彦さんは、何におなりになるの？　何をなさらうとするおつもりなの？』

『僕は矢張、繪をやらうと思ふんです。兄さんは實業家になれつて言ふんですけど。』

『さう？　何でも自分の好きなことをなさる方がいゝわ。――でも、男はいゝわねえ。やらうと思ふことは何でも出來るんですもの、そこへ行くと女はつまらないわ。』

氣がついて見ると、二人はいつか家の前に來てゐた。軒燈の磨硝子には、もう黄色い灯がにじんで、鎖された門の前の石疊には、塀越の梨の花びらが白く散つてゐた。俊彦は、くゞりの方から先にはひつた。咲子も續いてはひつたが、そのひつそりと暗い玄關先に立つと、足がすくんでうごけないやうな氣がした。

三　一つの灯

『どうも、遲くなりまして』

さう言つて、姑の前に咲子は手をついた。

『あ、お歸りかえ？』

姑は冷淡な調子で一言然う言つたきり、何も言はなかつた。うす暗い電燈の下で、姑は例のや

うに、謡曲の本を讀んでゐた。そして、實家の母から宜しくとの咲子の口上などは耳にもかけずに

『俊彦、お前、どうしてかう遲くなるのだえ？　何處を遊び歩いておいでだえ？』と鼈甲緣の眼鏡の奥から險しい眼を光らした。

『ボールを見に行くと、今朝、ちやんとお母さんに斷つて行つたぢやありませんか。』と、俊彦は袴の紐を解きながら不平さうに言つた。

『斷つて行つたつて、お前。もう六時ぢやないか、日が暮るまでには歸つて來るやうにしなけりやいけませんよ。――本當にすこし呑氣過ぎます。』

『そんな事言つたつて仕方がないや。友達と一緒なんだもの。』

『仕方がないつて事はありませんよ。』と、姑は聲を高くして、『兄さんが御留守だと思つて、勝手なまねをされちやお母樣が困りますよ。』

咲子は立場をなくして、姑の前におづおづとしてゐたが、姑が斯う言ひ捨てゝ、厠に立つたのを機會に、自分の部屋の方に引き下つた。そして、簞笥の前に行つて、着物を着換る爲めに帶を解き

はじめた。しゆつ〳〵と帶の鳴る音が、わけもなく心をめいらせて、又しても淚ぐましい氣持になつて來た。

茶の間の方では、姑が未だぶつ〳〵と俊彦を相手に小言を言ひ續けてゐた。それは俊彦に言ふ小言ではなかつた。みんな自分に言つてゐるのだと思ふと、一言一言が咲子の胸には針を打たれるやうに痛かつた。

咲子は脱ぎ捨てた羽織や解きかけた帶の上に俯伏して、しばらく顏をあげずにゐた。――いつそのこと歸つて了はう。よく、此家の事情を話して、とても居られない辛いわけを言つたら、お母樣だつて、どうでも辛棒しろとは言はないだらう。痩我慢してゐたつて馬鹿らしい。思ひ切つてこのまゝ歸つてしまはう！　咲子はさう思つて、立ちあがつて、解きかけた帶にまた手をかけたが、いざとなると矢張決心がつき兼ねるのであつた。その時、

『咲子さん！　咲子さん！』と呼ぶいらだたしい姑の聲がした。

『はい、唯今。』咲子は、震へる聲でかう答へて、手早く着物を着換はじめた。

その夜、姑は、持病の喘息の氣味で早く寢てしまつた。つい、二十日ばかり前に田舍から出て來た下婢は茶の間の隅の方で雜巾刺しをしてゐた。咲子は夫の書齋で、縫ひ物をしてゐた。

咲子の心は、先刻、あれからさん〴〵にきかされた、意地の惡い小言やらあてこすりやら、一束の針のやうな姑の言葉で、血のにじむやうにうづいてゐた。夫の留守をいゝことにして、日が暮るまで遊び歩いてゐるの、だから、女學生あがりなどは駄目だのと、ひどいことばかり言はれても、ぢつと默つて聞いてゐなければならぬ口惜しさ辛さ。それでも、せめて、優しい夫の慰藉でもあつたならと思ふのだが、その夫が、木だか石だか判らないやうな冷たい人で、その上、役所の用で月の半出張に暮してゐる。結婚生活といふものは、そんなにまでかなしいさびしい、つらい味氣ないものなのだらうか？ それが世間の常態だらうか？——咲子は、むすめの頃に描かれたいろ〳〵の夢の、あまり果敢なく消えてしまつた事を思ひ、狹い暗いところに押しつめられてどうにも身動きが出來なくなつて了つた自分の現在をあはれまずにはゐられないのであつた。

だが、一體どうして自分は、かう氣が弱くなつてしまつたのであらう。半年前の自分がいかに

快活な、いかにいき〳〵したむすめであつたかを思ふと、咲子は、すぐに意意地なく涙含んだりする今の自分が自分ながら不思議に思はれるのである。そして思ひ切つてすべてのものを反撥して、自分の欲するまゝに動くことの出來ない自分が、自分ながらはがゆく腑甲斐ない氣がするのである。女學校時代の友達の中には、よく婦人解放とか、女性の自覺とか云ふ事を口にして、自ら新時代の婦人を以て任ずるものも少くなかつた。下町の商家に生れて、この都會の古い傳統の中に生きて來た咲子には、さういふ議論めいた事には興味が持てなかつたので、さういふ友達から、よく『芳川さんは駄目よ。古い女だから。』などと、言はれたものだが、本當に自分は古い女なのであらう。そして、昔から多くの女が辿つて來たやうな、時に悲しい路を辿つてゆく外はないのであらう——そんな事を、咲子はそれからそれと思ひつゞけてゐた。

『義姉さん！』

その時、小さい聲でさう言ひながら俊彦がはひつて來た。

『あら、未だおやすみにならなかつたの。』と、咲子は涙含んだ顏をかくすやうにして、わざと元

氣な調子で言つた。

『すみませんが一寸これをつけて下さいな。』と、俊彦は、靴下留のとめ金のはづれかけたのを咲子の前に出した。そして、突膝をしたまゝ、火鉢に兩手をかけて、例のやうに、落着なくもぢもぢとしてゐた。

咲子はすぐにそれをつけてやりながら、

『俊彦さん。』と、呼びかけた。

『え？』と、俊彦は、義姉の方を見た。咲子は何か言ひかけようとしたが、不意に、何者かにその言葉を奪はれたやうに押しだまつてしまつた。そして、眼をあげてちらと俊彦の顔を見た。くつきりと白い頰に、描いたやうに秀でた眉、その下には睫毛の長い眼が黒い瞳をぢつと此方に向けてゐた。而し、その眼は、どうしたのか、涙含んでゐた。

『俊彦さん？』

咲子は、もう一度よびかけた。

『え？』

『どうしたの？　どうかなすつたの？』

『お母さんに叱られたから――？　え？』

『僕なんか、いくら叱られたつて構やしません！』と、俊彦はきつぱりと言つた。そして、そのなみだぐんだ眼で

『僕は唯――』

『…………』

咲子は、その眼に無言の問ひを籠めて、俊彦を見た。

『義姉さんが、お氣の毒なんです。僕は叱られたつていゝけど、義姉さんをあんなに叱るつて法はありませんよ。』

『まあ、そんな――』

咲子は、淋しく笑つて見せたが、咲子の眼にも、見る／＼涙が一ぱい溜つて來た。

四 病院の窓

風邪から肺炎になつて、咲子が病床に就いたのは、春も暮れ近くなつてからだつた。四十度近い高熱が續いて一時はかなり危險な狀態にまで進んだが、どうやら持ちこたへて、次第に回復に向つて來た。が、元來尫弱の方ではあるし、その上どうやら普通の身體では無くなつてゐるらしいので、醫師の勸めにより、すつかり快くなるまでの幾日かを、お茶の水の病院で靜養することになつた。

房子は、殆ど每日のやうに、學校の歸りに姉の病室を訪づれた。咲子は無口な看護婦一人に附添はれて、いつも淋しさうにしてゐた。白い壁に三方を圍まれた室の、窓に近い寢臺に橫になつて、頰のやつれで一層大きく見える眼の、黑水晶のやうな瞳でぢつと何かを見つめてゐる咲子の樣子は、いつ見ても餘りに淋しいものであつた。

しづかに扉をあけて室にはひつた房子が、

『どう?、姉さん!』と囁き乍ら枕もとに步み寄ると、咲子の蒼ざめた頰に微笑の花が咲く。黃昏のうすあかりの中に咲く白い花のやうな、つめたい微笑の花が咲く。

『ありがたう。わりに氣分がいゝの? 今日は早かつたのね。』

『急いで來たのよ。』と、房子は、汗ばんだ額を、ネルの袂で無造作に押拭ふやうにしながら言ふ。房子の頰は、薔薇色に燃えてゐる。その、元氣な、初々しい妹の樣子を、笑ましげに見やり乍ら、咲子が何か言はうとしたが、そのまゝ口を噤んで了つた。

『どう昨夜はお寢れになつて?』

『昨夜は、いけなかつたの。その代り、先刻一時間ばかりうと〳〵しましたの。そして私面白い夢を見たのよ。』

『どんな夢?』

『…………』

『どんな夢御覽になつたの?』

『私が未だ京橋のお家にゐる時分ね。一昨年の春だつたわね。房ちやんと二人で、井の頭に遊びに行つた事があるわね。その時の事を夢に見たのよ。——あの時分は、ほんとに樂しかつたわねえ。』咲子は、返らぬ日を思ひ返すやうな、うつとりとした眼つきをして、一寸言葉を切つてから、『本當に房ちやんなどはいゝわねえ。房ちやんなどはこれからよ。』

『あら、そんな事仰有つて、姉さんだつて——。』

『いゝえ。私なんかもう駄目よ。』咲子の話は、ともすれば果敢無く打嘆くといふ風な調子になり勝ちだつた。

房子は、毎日、姉の病室で少くとも一二時間の時を過すのが例だつた。藥の香であらうか？病院に特有の輕い刺戟性を帶びたうすらつめたい空氣の、しつとりと湛へられた室に、やがて靜かな黄昏が訪れて、臥褥の傍の小卓の上の矢車草の濃い紫が、電燈の灯に美しくにほひ初めるまでも、房子は姉の枕邊に坐り續けた。

『今日もまた遲くなつたのね。ぢや、もう歸らなければならないわ。また明日ね。』

咲子は、かう言つて別れを惜んだ。病氣のせゐか、ひどく人懷ツこくなつてゐる姉は、明日はすぐに逢へるのに、この儘遠く別れて了ひでもする人のやうな名殘惜しげな樣子をするので、房子も、つい〳〵時を過して、夜になつてから歸る事も度々あつた。

ある日、房子は、そこで俊彦に會つた。房子が例のやうに、咲子と話をしてゐると、面會人の知らせがあつた。扉を開いてはひつて來たのを見ると、制服姿の俊彦であつた。俊彦は、最初の一目で、そこに房子の居るのを認めた。そしてぽツと赧くなつた。房子も同じやうに赤くなつた。

『あら、俊彦さん！』と、咲子も思ひがけない喜びに聲を躍らした。『あなたでしたの？私何人かと思ひましたわ。』

俊彦は、刹那の困惑から、勇敢に自分自身を救ひ出した。そしてつか〳〵と義姉の枕もとに歩み寄ると、傍の房子に一寸會釋してから、

『義姉さん、どんな工合です？』と訊いた。

『ありがたう。もう大へん宜うございますの。この分なら、もう間もなく退院出來さうですわ。』

『さうですか？、僕、疾くに來ようと思つたんですが——。』辯解がましくそんな風に言ふ俊彦の額を、微笑を含んだ眼で見上げ乍ら、咲子は、稍揶揄ひ氣味な調子になつて、

『本當に、どうして俊彦さんが來て下さらないだらうと思つてましたわ。そして、毎日、私、待つてたんですわ。』

『すみませんでした。僕、毎日々々、來よう來ようと思つたんですが——。』と、俊彦は眞面目に辯解を續けながら、携へて來た果物の籠を卓の上に置いた。——そこへ、看護婦が夏水仙の鉢を捧げてはひつて來た。

『これもお客樣からでございますよ。』看護婦は、さう言ひながら、果物籠を並べてそれを、卓の上に置いた。

『まあ、いろ〳〵ありがたう。い〻花ですわね。』と、咲子は心から御禮を言つた。

『い〻花ですわね。』と、房子も言つた。言つてしまつてから、何となく頰が熱くなつたやうな氣がした。

『義姉さんは、水仙がお好きでしたから——。でも、これ、夏のですから——。』と、俊彦は少しはにかんだやうに言つた。夏水仙のあるかなきかの淡い香りが一座に漂つた。それと同じやうな淡い情緒が、三人の胸から胸へと流れた。

『この花何て云ふんですか？』俊彦は、今、自分のもつて來た夏水仙の花の純白と映り合つて、濃い紫を更に濃く浮き立たせてゐる矢車草に眼をやりながら、斯うきいた。

『矢車草つて云ふんですの。』と、房子は答へたが、又、意氣地も無く頰が、赤くなつた。房子は、心の中で囁いた（——あら、また赤くなつて了つたわ。私の顏、何てだらしがないんでせう？）

『矢車草？　い〻花ですね。』

『房ちやんの好きな花ね。』と、咲子は微笑しながら言つた。そして若い二人の顏を代る〳〵見ながら『花言葉といふのがあるわね。そら、いろ〳〵の花にそれ〳〵の意味をもたせるのよ。希望だとか、喜びだとか、ね。矢車草は何の花か知つてますか？』

『私、知らないわ。』と、房子は無邪氣に言つた。

『俊彦さん、御存じ？』

『僕も知りません。』

『ぢや敎へてあげませうか？』

『敎へて頂戴。』と、房子は促すやうに言つた。

『石川啄木——あの、肺病でお亡なりになつた歌人ね、房ちやん知つてるでせう？』

『知つてますわ。私、あの方のお歌大好きなんですもの。』

『あの、啄木の歌に、矢車草を歌つたのがあつてよ。函館の青柳町こそかなしけれ——つて云ふのよ。』

『あゝ、その歌なら私知つてますわ。』と、房子は言つた。そして、そして、その續きを言つて見ようとしたが、ぱつたりと言葉が咽喉につかへて了つた。その續きは——友の戀歌矢車の花、といふのである。

『矢車草はね、片戀の花なんですよ。』と、咲子は言つた。

『私、些とも知らなかつたわ。そんな花なら、私、もう好きになつて上げないわ。』房子は、三度、頰を赧めながら駄々兒染みた調子で言つた。——そして、俊彦が、きりツと引締つた口もとに微笑を含んで、ぢつと自分を見てゐる、その眼つきにぶつかると、はづかしさの爲めに居ても立つてもゐられぬやうな氣持がした。房子は、くるりと背を向けて、窓越に庭前の方を眺めてゐた。

俊彦は三十分ばかりゐて、歸つて去つた。俊彦が去つて了ふと、房子は漸く自分の自由を取戻す事が出來たやうな氣がした。同時に、急に、かう、樂しい夢からさめたやうな、妙に淋しい氣持がした。

『あの人、本當に優しい人よ。あの人だけは私、本當の弟のやうな氣がするのよ。』と、咲子は、俊彦の去つたあとでしきりに俊彦を讃めた。

『さうね、親切さうな方ですわね。』と、姉の熱心の言葉に合槌を打ち乍ら、房子は、不思議な心の動きを感じた。何となく姉が羨ましいものに思はれて來たのである。あの人と、そんなに仲好

くしてゐる姉が、何となく羨ましい——さういふ氣持がして來たのである。
『でも、何だか男らしくないやうな方ね。』房子は、非難の意を籠めて、こんな風に言つて見た。が、言葉とはまるきり反對の方向に動いてゐる自分の心持を欺く事は出來なかつた。——房子はひとりで又赧くなつた。

その日房子は、夜になつてから家に歸つた。歸りの電車の中でも、電車を降りて歩きながらでも、房子は、眼の前にちらつく一つの幻影を掻き退ける事が出來なかつた。きりツと引締つた唇、しつとりとうるんだ黑い眼、それから少し吃り勝ちに物を言ふ、重い、が、美しい澄んだ聲——房子は、うつとりとした心持の中で、その幻影を追ひ續けた。
『お客樣？』家に歸ると、玄關先まで迎へて呉れた母に房子は斯うきいた、襖越にその氣配が感じられたので。
『あゝ。圭次郎が來てゐるんだよ。』と母は言つた。

『圭さんが？』
『あゝ。』と母はうなづいて、『どう？咲子の機嫌は？』
『えゝ。今日は大へん元氣でしたわ。もうこの分なら、すぐに退院出來るつて言つてらしつたわ。——明日あたりお母さんも行つてお上げにならない？』
『あゝ私も行つて見ようよ。』
『私、姉さんがいつまでもあそこにいらツしやればいゝと思ふのよ。小石川の方へ歸つて了へば、もうなか〳〵逢へなくなつて了ふんですもの。』
『本當にね。』と、母も淋しさうに笑つた。
夕飯は病院で姉と一緒に濟まして來たので、房子は、圭次郎に一寸挨拶すると、すぐに、自分の部屋に引込んで了つた。而して、机に向つたが、教科書を擴げて見る氣にもなれず、ぼんやりと頰杖を突いてゐた。またしても、執拗く眼前にちらつく幻影である。房子は、何が無しに一つ溜息を吐いた。

『房ちやん!』と呼びながら、その時、襖を開けてはひつて來たのは、圭次郎であつた。

『房ちやん、何をぼんやりしてゐるの?』圭次郎は人懷ッこい眼もとに微笑を浮べて、立つたまゝから問ひかけたが、やがて、房子の机の傍に行儀よく坐ると、袂から金口の紙卷を、とり出した。

『久振ね。圭さん?』

『ほんとに久振ですね。いつか一寸御寄りした時は、をばさんきりだつた。房ちやんは留守だつた。』と、圭次郎は額際に亂れかゝる髮を片手で掻き上げながら『しばらく見ないうちに、房ちやんもすつかりいゝ娘さんになりましたね。房ちやんはたしか十七になつた筈ですね。』

『えゝ。』

『咲ちやん、病氣ださうですね。もうもういゝんですか?』

『えゝ。もう宜いのよ。』

『順天堂にはひつて居るんださうだね。えゝ。』

『僕、一寸見舞に行き度いんだがね。』さう言つて、圭次郎は何か考へ込むやうな樣子をした。

圭次郎が、姉とどういふ關係の人であつたか?は、房子も近頃になつて薄々感附いてゐた。圭次郎がどんなに姉を愛してゐたか?そして、その破れた戀の爲めにどんなに苦しんだか?──その邊の消息も、朧氣ながらにではあるが、房子も察し知つてゐた。一時は、何となく氣味の惡い人のやうにも思つてゐたが、今では、房子は、寧ろ圭次郎に同情してゐる。そして、この人の愛の手に身を委ねてさへ居たら、姉も今のやうに不幸にはなつてゐなかつたらうとも思つてゐる、見舞に行き度いといふ圭次郎の言葉を聞き、圭次郎が未だ姉を愛してゐる事を知ると、房子の心は急に涙含ましくなつた。

『でも、僕なんかが見舞に行くと、咲ちやんはめいわくだらうな。』圭次郎は淋しさうに言つた。

『いゝえ。圭さん!姉さんは屹度よろこびますわ。』

『房ちやんはさう思ひますか?』

『えゝ、私、さう思ひますわ。』

『でも、あつちの家の人に知れたらわるいだらうね。』

『それは――でも、構はないんでせう。親類同志の仲なんですもの。』

『さう言へばさうだね、でも、何だか工合が悪い。なまじい見舞に行つたりして咲ちやんに怒られたりしちや、つまらないしね。』圭次郎は金歯のちらつく口もとに、氣弱な微笑を浮べて、こんな風に繰返した。

『そんな、怒るなんて――そんな事ありませんわ。』

『ぢや、房うちやん、房うちやんから聞いて呉れないか？それとなくね。僕が見舞に行つてもいゝかどうかをね。』

『えゝ、聞いて見ますわ。――でも、聞かなくたつていゝと私思ひますわ。』と、房子は答へた。

五　夜の夢　晝の夢

いつものやうに、そつと音を立てないやうに扉をあけると、枕もとに坐つて居た看護婦三井さんは、膝の上に開いた雑誌からあげた眼に、靜かな微笑を湛へて房子を見迎へた。

『お寝りんなつてゐますの？』

『えゝ。先刻から――。』

口数のすくない三井さんは、さう、簡單に答へた。

咲子は、すや〳〵と眠つてゐた。病にはやつれながらも、その爲めに却て淸らかさを加へた白い頬は、卓の上の夏水仙の花よりも冷たかつた。夏水仙の花は、かすかな香ひを漂はしてゐた。そのにをひが房子の胸をわけも無くときめかした。いつの間にか、自分の心に刻みつけられて了つた一つの面影――房子は思はず頬を赤くした。

『お熱はどうでございますの？』

『もう殆ど無いやうでございますよ。間もなく御退院になれますでせう。』と、三井さんは言つた。

房子は、枕元の椅子に腰をおろして、姉の寝顔を打眺めた。すや〳〵としづかに寝息をたてて

はゐるが、折々、痙攣るやうに眉の根を動かすのは、何か苦しい夢をでも見てゐるのでは無からうか？——姉さんの病んでゐるのは、身體では無い、心なのだと、房子は思つた。そして、一二年の間に五つも六つも年をとつて了つたやうな姉の顏を、房子はいたましく、うちまもるのであつた。

房子は、袂の中から編み物をとり出した。三井さんは、雜誌を持つた儘、何か用事でも思ひ出したやうに、部屋の外に出て行つた。

『房うちやん！』

一心に編み棒を動かしてゐた房子は、さう呼び掛けられて驚いて眼をあけた。いつか眼を覺ました咲子は、淋しく微笑みながら、房子の方を見てゐた。

『よく、お寢れて？』

『えゝ。相變らず夢ばかり見るの。——本當に私、どうしてこんなに夢ばかり見るんでせうね。』と、咲子は後半を獨言のやうに言つた。

『さう、そんなに夢をごらんになるの？』

『房うちやんは夢を見る事は無いの？』

『私なんか、もう眠つたらそれつきりなの。そして、いつも朝寢をして阿母様に叱られるのよ。』

『私だつて娘の時代にはさうだつたわ、でも房うちやんは夜の夢を見ない代り——』と、咲子は、再び房子にほゝゑみかけて、『今、さうしてゐても、いろ／＼の夢を見てゐるんでせう。白日の夢といふのよ。』

『あら、私、そんな夢なんか見やしないことよ。』

房子は心持顏を赤くして言つた。

『夜の夢は暗い夢よ。白日の夢は明るい夢よ。明るい夢が見れなくなると、暗い夢を見はじめるのよ。——明るい夢がだん／＼暗い夢に變つてゆくのよ。』

咲子の言葉は謎のやうであつた。房子は、唯、默つてそれを聞いてゐた。

『ね、房ちやん！出來るだけ長くその明るい美しい夢を見續けるやうに——なるだけ長く處女で

いらつしやい！』

『あら、姉さん。』

房子は笑ひに紛らすやうに言つたが、咲子がいかにも眞劍な、思ひつめた表情で、涙含みさへしてゐるのを見ると、妙に胸を壓へつけられるやうな氣がして、笑はうとしても笑へなかつた。

『大事にしておくのよ。あなたの胸のなかの美しい夢をね。』

咲子は追ひ掛けるやうに言つた。

房子は、稍々狼狽した。鋭く冴えた姉の眼で、自分の胸の中をすつかり見透かされたやうな氣がした。美しい夢、明るい夢、白日の夢——然う、それに逢ひたいのだつた。房子は、姉が何を言つてゐるのかが、はつきりと判つた。そして、或る羞恥の爲めに思はず頰を赤くしたのであつた。

『俊彦さんね。昨日も來て下すつたのよ。』

『さう？』

房子の心臟は小鼓のやうに鳴りはじめた。

『でも、すぐに歸つて了つたわ。』

『さう？』

房子は、そんな事が私に何の關りがあらうといふ風にわざと興味無ささうな調子で言つたが、心の中ではかう呟かずにはゐられなかつた（意地わるなお姉さん、何故そんな事を仰有るんでせう？——）

今日も、房子は一時間あまり姉の枕もとにゐた。——今日房子は、一つの役目をもつてゐるのだつた。それは、あの圭次郎に頼まれた手紙を、姉に渡すことであつた。姉は既に人妻である。人妻である姉に、たとひ親類同志とはいへ、こんな、男からの手紙などを渡していゝのか知ら？さう一應は反省して見たものゝ、圭次郎の熱心な頼みを、無下に斥ける勇氣は、房子には無かつた。唯、病氣の見舞だけだ、郵便で出して、もし、人に見られでもするといけないから——さう言つて頼まれると、どうしても、いやとは言はれなくなつた。で、その手紙を、帶の間に挾んで

ゐるのであつたが、さて、どうしたものであらう？叱られはしないだらうか、憤られはしないだらうか？と、先刻から連りに思ひ惑つてゐるのであつた。

『姉さん、これね――』

房子は思ひ切つて、帶の間から、その白い角封の手紙をとり出した『圭さんが、これを姉さんにお渡し下さいつて。』

『圭さんが？御手紙？』

咲子は聲をはづまして言つた。

『御見舞に行きたいけれど遠慮しますつて。で、これ、御見舞の御手紙ですつて。』

『さう。』

何氣無ささうにさう言ひながら、咲子はそれをとりあげたが、その細い指先がわな／＼とふるへるのを、房子は見逃しはしなかつた。

『私、いけないかしら？と思つたんですけど。』

房子は、姉の顏色をうかゞひながら言つた。

『さうね。この御手紙は頂かない方がいゝかも知れませんわね。』

『惡かつたら御免なさい、でも――』

『いゝわ、拜見するわ。』

咲子はさう言つて、その手紙を枕の下に押入れるやうにした。そして、ぢつと眼を閉ぢた。長い睫毛に、いつの間にか、涙の珠が綴られてゐた。

やがて房子が歸つたあとで、咲子は、その手紙の封を切つた。書簡箋に三四枚、あまり上手でない字で、ぎつしりと書かれたその手紙を、咲子は繰返し／＼讀んだ。――それは、病氣見舞の手紙には違ひ無かつた。が、それ以上になほ種々の事が書かれてゐた。叔母さんのお話で聞けば、咲ちやんにもなか／＼苦勞があるとの事ですが、それは本當だらうか？何人が咲ちやんにそんな苦勞させるのだらうと思ふと、私は腹が立つ。しかし、さういふ私も、毎日侘びしい氣持で日を過ごしてゐます。世の中には『幸福』といふものはないものですね。幸福だつたのは、あの

時分だけ。私は、咲ちやん達と無邪氣に遊んだあの時分がなつかしくてならない。——辿々しい文句で、そんな事が書かれてゐるのを讀むと、咲子の眼からは止め度もなく涙が流れた。あの人は矢張自分を愛して奨れたのだ。自分が、こんな辛い境遇に落たのも、あの人の愛を裏切つた罰なのだ。本當に何といふ愚な私だつたらう？

咲子は、心から、とりかへしのつかないあやまちが悔いられるのであつた。

泣き濡れた咲子の眼には、枕もとの卓の上の、夏水仙の白い花と、矢車草の紫の花とが、白と紫と、二つの色を滲み合はして、ぽツと美しい緣暈をつくつた。その緣暈の中に、咲子は、色の淺黑い、口もとの引き締まつた圭次郎の、苦みばしつた顏を思ひ描いた。

六　疑はれて

六月の初めに、咲子は退院した。退院はしたが、咲子はどうも氣分がすぐれなかつた。肺尖の方の故障は、さしたる事もなかつたが、妊娠から來た身體の變調は、不順な梅雨季の氣候に刺戟

されて、咲子は朝から晩まで、物なやましい氣分に封じられてゐた。而して、ひどく感じ易くなつた心には、一寸した事が妙に悲しかつたりして、何といふ理由もないのに、ほろ〳〵と涙が出るのであつた。

役所の用で、長い事、東北の方に出張してゐた夫は、久し振で歸つて來たが、咲子には、どうしても、その人から、夫としての親しみを受取る事が出來なかつた。三十四といふ壯齡で、既に工學博士の學位を有し、築港、架橋等の方面では、類のない手腕家として、重く用ゐられてゐる咲子の夫の山縣詮之助は、彼自身、石と金とで造られた人間の如く見えた。酒も飲まず、煙草も吸はず、品行方正の、言ひ分の無い紳士ではあるが、理智一點張の、情味といふものゝ全く無い男で、若い妻の、たよりなげな樣子を見ても、慰めの言葉一つかけてやらうとはしなかつた。

役所から歸つて、皆と一緒に晩食を濟ますと、そのまゝ、すつと書齋に引込んで、熱心に勉强をはじめる。——咲子は、紅茶などを淹れて、おづ〳〵とその書齋にはひつて行く。そして卓の上に紅茶を置く。が、詮之助は振向いて見やうともしない。

『あなた！』咲子は、あまりの素氣なさに、恨めしい氣がして、かう、思ひ切つて呼びかけて見る。
『何だ？』詮之助は、眼をあげる。何か用か、用なら早く言へ！　といふ眼付である。何といふ冷たい眼。全く取りつく端もない。咲子は急に悲しくなつて思はず涙含んでしまふ。

さういふ咲子の樣子を、不思議さうに眺めながら、

『どうかしたのかい？』

詮之助は言ふ。

『いゝえ。どうもしやしません！』

咲子は唇を噛んで低くさう答へる。

『どうだね。身體の工合は？』

『…………』

『大事にするんだね。時々、醫者へ行かなきやいけないよ。』それでも深切さうな調子で斯んな事を言ふ。が、さう言つて了ふと、もうそこに咲子が居る事などは全く忘れてしまつたやうに、一心不亂に書物に見入るのである。咲子にもう少し勇氣があつたら、彼女はいきなりその本を夫の手から奪ひ取つて、床に叩きつけて、さうして斯う叫んだかも知れない『あなたはそんなに御本がおかはいゝの？　私と御本と、どちらが大切だと思つていらつしやるの？』

だが、勿論咲子には、そんな勇氣はない。咲子は、そつと夫の傍から離れる。そして、自分の部屋へはひつて、針仕事の前に坐つて、ぼんやりと思ひ沈むのである。

結婚！　これが結婚といふものなのだらうか？――夫婦つて、こんなものなのだらうか？　私は、かうしてあの人の子供を生む。だけど、あの人は私にとつて何だらう？　夫とは名ばかり、まるで氣心も判らなければ、得態も知れない、よその男の一人ではないか？　『路傍の人』といふ言葉があるが、あの人は、その『路傍の人』に過ぎないのだ。身體はかうして一緒にゐても、心と心とに、何のつながりも親しみもないあの人――私は、あの人の子供を生まなければならないのだらうか？

いやだ！　いやだ！と咲子は口に出して呟いて見た。そして、疊の上に兩袖を投げ出して、そ

の上に顔をおしあてた。

『奥様！』と呼ぶ聲が障子の外でした。咲子は驚いて、面をあげた。呼びかけたのは女中のまつであつた。

『奥様。いらつしやいますか？ 御隱居樣がお呼びでございますよ。』

『お母樣が？』

『はい。あの、何か御用がございますさうで、すぐにいらつしやつて下さるやうにといふ事でございました。』

まつの勿體振つた言葉つきの中には、何か知ら、咲子の心を脅かすものが潜でゐたお母樣が何御用だらう？ と思ふと、咲子の胸は意氣地もなくをのゝくのであつた。

咲子は、胸ををのゝかしながら、姑の部屋へはひつて行つた。電燈の下に、白髮頭を銀のやうに光らせて坐つてゐた姑は、大きな鼈甲縁の眼鏡のかげから、上眼づかひにじろりと咲子を見迎へた。

『おかあ樣。何か御用でございますの？』

『なあに。たいした用でもないがね、一寸咲子さんに訊いて見度い事があつてね。』

姑は、煙管に煙草をつめながら、例のゆつくりとした言葉附で言つた。

『何でございますか？』

『へんなことを訊くやうですがね、お前さん、何か私達に隱してゐる事がありはしませんか？』

『隱してゐること？ まあ、何でございませう？』

『そんなおぼえがおありではないのかえ。』

姑の聲は、柔かではあつたが、へんに無氣味な冷たいひゞきを帶びてゐた。

『隱してゐる事なんて、私、そんな事はございません。』

おづ〳〵と姑の顔を見上げながら、咲子はさう言つた。

『そんなら結構ですけどね。――ぢやあ、一寸訊きますが。』と、姑は、益々改まつた調子になつて、長火鉢の曳出を開けた。そして、一寸、その中をのぞき込むやうにすると、『あゝ！』と小さ

く叫んだ。そして、荒々しくその中を掻き廻すやうにして、

『ぢや、慥かにこゝに入れて置いた筈なんだがね。』と、呟くやうに言ひながら、もう一つの曳出を開けた。が、そこにも求めるものは見出されなかつた。姑は、ひどく狼狽した樣子だつた。

『何でございませう？　おかあ樣。』と、咲子は見兼ねたやうに聞いた。

『たしかこゝに入れておいた筈だが、ぢや、何處か別のところに置いたか知らん？　どうも近頃物忘れがひどくなつてね。』

さう言つてから、姑は、再び改まつて咲子の方に向き直つて、『實はね、まつがへんなものを拾つて私に見せて呉れたのだがね、お前さん、何處かよその男と手紙のやりとりをしてゐやしないかえ？』

さう言はれて、咲子は初めて氣がついた。

その手紙といふのは、あの圭次郎からのに違ひ無い。女名前にはなつてゐたが、手蹟は爭はれぬ男の手蹟で、親しい昔馴染の仲でなければ言へないやうないろ〳〵の文句が、その中に書き込

まれてゐた。讀んで了つて、すぐ破からうとしたが、何だかそれも忍び無い氣がして、そのまゝ帶の間に挾んでゐた。では、それを落したのであらうか？　あれを見られてしまつたとしたら？――――さう思ふと、咲子は思はずくわつとした。

『まさかそんな事もなからうと思ひますが、近頃新聞などでも時々見かけますね。そんな大それた眞似でもして呉れてはと、私は氣に病んでゐるんですよ。愛とか何とか、昔者の私には、むづかしい事は判りませんが、咲子さんは兎に角娘ではないんですからね。娘なら娘で、どんな不義いたづらも、またそれで始末のつけやうもあらうと言ふものですけれど――』

姑は、ねち〳〵とした調子で、こんな風に言ひ續けるのであつた。

『まあ、不義いたづらなどと、そんな事をおかあさま。』――と、咲子は、口惜しいやら悲しいやらで思はず涙ぐみながら言つた。

『何も、お前さんが不義いたづらをしてゐるといふのぢやあないのですがね。あんな手紙をやつたりとつたりしてゐると、そんな風にうたがはれても仕方がないぢやあないか。』

『でも、別に、たゞ。』と、咲子はしどろもどろな調子で、『子供の時から心安いなかなものですから——』

『何もやましい關係でないといふのなら、何も女名前になどする理由もなしさ。まあ、幸ひ私の手にはひつたからい〻やうなもの〻、あれが詮之助の眼にでも觸れでもしてごらん！』

姑は、強くきめつけるやうに言つた。

『…………』

咲子は辯解する言葉もなく押默つたま〻うつむいてゐた。。悲しい涙、口惜しい涙が、あとからあとからと頰を流れた。とうとうたまらなくなつて、疊につツぷしてす〻りあげはじめた。

『泣かなくても宜いぢや無いか？　何もやましい事が無いといふのならば、些とも泣く事はありはしない。』

さういふ姑の言葉附には、何かやましい事があるのだと、思ひ決めたやうな氣持が讀まれた。だが、何う言つて辯解したらい〻だらう？　女名前などに人目を詐つて、さま〴〵の思ひを述

べてゐるあの圭次郎の手紙――むしろ、戀文と言つても宜い位のあの手紙！
『まあ、宜いから彼方へおいで、手紙を探し出してから、またお前さんに訊きたい事がある。今夜はもうい丶から彼方へおいで。』姑は、うるさいと言ふやうに頭を振つた。

泣きながら姑の前を立つた咲子は、自分の室に歸ると、柱に凭れて立つたま丶、袂を顔に泣きつゞけてゐた。そのすゝり泣きの聲に伴奏するやうに、外戸では蕭々と五月雨の音がした。

『姉さん！』そこへはひつて來てかう呼びかけたのは、俊彦であつた。

『姉さん！』と、俊彦は例の優しい調子で、もう一度かう呼び掛けて、『これを落したんでせう？』
さう言ひながら咲子の手に押しつけるやうにしたのは、咲子が落したあの圭次郎からの手紙であつた。

『僕、あの火鉢の曳出から、そつと盜み出したんですよ。おかあさんはね、これを、兄さんに見せようとしてゐたんですよ。』俊彦は、淋しく微笑しながらかう言つた。

『まあ、あなたが——盗んで——?』
『えゝ。おかあさんが、まつから受取つて火鉢の曳出に藏ふのを、僕見てゐたんです。あとで姉さんが困るかも知れない、と思つたから、そつと盗み出してやつたんです。姉さんこんなもの落してはいけませんね。』
『ありがたうよ。ありがたうよ。俊彦さん。』
と、咲子は、兩手で俊彦を抱くやうにして、心からの感謝の言葉を、涙と共にほとばしらせた、
『おかあさんは、ほんとに意地悪です。どうしてあんなに意地悪なんだかと思ふと、僕、腹が立つんですよ。』
『いゝえ。私が悪いのよ。私がいけないのよ。疑はれても仕方がないのよ。でも、俊彦さん、あなたゞけは信じて下さるわね。私が、そんな女でないといふ事を。ね、ね、俊彦さん。』俊彦は幾度も強くうなづいて見せた。

七 銀座の宵

河岸には爽かな風が吹いて、濠に映る燈火も、涼しく搖れてゐた。圭次郎は、ぼんやりと、その燈火の影を眺めてゐたが、
『ぢや、つまり僕の手紙で、咲ちやんが濡れ衣を着せられてるつてわけなんだね。』
『え、まあさうなのよ。』と、房子も沈んだ調子で言つた。
『悪い事をしちやつたなあ。僕、つい下らない事を書いたんだもんだから——』と、圭次郎は、深い悔いの溜息をついて『ぢや、その手紙を姉さんに見られちやつたんですね。』
『義母さんは大そう八釜しい方なんですつて。だから、姉さんも辛いのよ。』房子はさう言ひながら、圭次郎の横顔を見上げて、『だけど、圭さん、どんな事をお書きんなつたの?』
『別に、悪い事を書いたんぢやあないけど。』と圭次郎は、詫びるやうに、『本當に濟まないなあ!何うしたらいゝだらうなあ!』

『でも、私、そんなに心配する事はないと思ふわ。そのうちに疑ひも解けると思ふわ。』
『弱つたなあ。惡いことをしちやつたなあ。』
圭次郎は、しきりにかう繰返した。
そんな風に、當惑して、悄げ切つてゐる圭次郎を見ると、房子は、なまじいにそんな話を圭次郎の前にもち出した事が悔いられた。言つても仕方がない事だつた。默つてゐれば宜かつた。さう思はずにはゐられなかつた。最初、姉の口からそれを聞いた時は、房子は圭次郎の輕卒な振舞が許し難いものに思はれたが、圭次郎がどんなに姉を愛してゐるかを、又、姉も心の底ではひそかに圭次郎を愛してゐるに違ひない事を思ひやつて見ると、圭次郎を責める氣にはなれなかつた。戀――男女の愛慾の惱みといふやうなものも、近頃の房子には、朧氣ながら判りかけて來たのであつた。
『姉さんも本當にお氣の毒なのよ。義母さんは、そんな風なやかましやさんだし、義兄さんは、まあ變人見たいな人なんでせう。いつそ出て來て了はうか知ら？　なんてこの間も言つてらしつたわ。』
『出て來ちまへば宜いんだよ！』
圭次郎は妙に昂奮した調子で言つた。
『けれど矢張然うもいかないでせう。それに――』と、言ひかけて房子は口を噤んだ。姉さんはもう唯の身體ではない。圭次郎はそれを知つてるだらうか？
やがて二人は、新聞社などの、大きな建物の並んでゐる暗い通りへ曲つた。その通りを拔けると、銀座の大通りだつた。そこには、晩涼を追ふ漫歩の人々が華やかな火影の中を流れ、うづまき、押しかへして、ペエブメントに鳴る無數の跫音が或る浮々とした音樂を合奏してゐた。まばゆくいろどられた飾窓の前には、中型の浴衣がひるがへり、飲料店の廣間には、眞新しい麥藁帽がきらめいてゐた。房子は、圭次郎と並んであるきながら、ふと、行路樹の根元の、瓦斯のこぼれにほのめく草花の色に眼をとめた。この雜沓の中で、何人にも氣がつかれずに咲いてゐる可憐な草花――それが、何んとなくいとしくかなしく思はれた。

KＩ堂へ寄つて、アイスクリームを飲みながらも、圭次郎はひどく屈托した樣子で、あまり口も利かなかつた。そこを出ると、

『房ちやん、家まで送つて行かなくつてもいゝかい？』と、圭次郎は言つた。圭次郎は、そこの角から電車へ乘らなければならなかつた。房子の家は、そこから二三町しかなかつた。

『いゝわ。送つて下さらなくても。』

『さう？ ぢや、左樣なら。氣をつけておかへんなさい。』

圭次郎は、さう言ひ捨ると、滿員の電車にかぢりつくやうに乘つた。

その電車の走つて行くのを、一寸の間ぼんやりと眺めやつて居たが、房子は、ふと我に歸ると、急ぎ足で、家の方へ歩きはじめた。――房子の心は、妙に哀しく濡れてゐた。

人ごみの中を押を分けるやうにして歩いてゐた房子は、はツと息を引いて立ちどまつた。そして、思はず、

『あら！』と言つた。

『あ！』と、むかうでも小さい驚きの叫びをなげた。俊彦だつた。俊彦が一人の青年とつれ立つて來るのに、思ひがけなくも行き合つたのであつた。――病院以來、二人は初めて顏を合せたのであつた。

『しばらくでございましたね。』

房子はさう言つたが、何だかひどくませた口の利き方のやうな氣がして、言つてしまつてから思はず赤くなつた。俊彦はひどく狼狽して、矢張赤くなりながら二つ三つ續けざまに、お辭儀をした。

俊彦の伴の青年は――二十歳ばかりの、服裝といひ、容貌と云ひ何となく垢染みた感じのする田舍風のその青年は、無遠慮に眼を睜つて、二人の樣子をぢろ／＼と見くらべるやうにした。

俊彦は、それに氣がつくと、青年の方へ眼をやりながら、

『宅の義姉さんの妹さんの房子さんだよ。』さう言つてから、今度は房子の方へ向いて、

『今度、宅に來て吳れた押川といふ人です。』と、紹介した。

『わす、おすかはちふ者です。どうぞよろしく。』

新米の書生の押川は、頓狂な聲をあげてかう言ひながら、ぴよこりと一つ頭をさげた。その樣子が餘りをかしかつたので、房子はもう少しでふき出すところだつた。その房子の顏を見ると、俊彦も、思はず脣を綻ばしかけた。――次の刹那には、とうとうたまらなくなつて二人一緒に笑ひ出して了つた。

その笑ひが、二人の心を工合よく解きほぐして吳れた。

『御散歩でございますの？』房子は、滑かな調子でかう話しかける事が出來た。

『えゝ。』と、俊彦はうなづいて『あなたも？』

『えゝ。一寸お使ひに出ましたの。』

『この近くなんですか？』

『私ん許？　えゝ、すぐ近くでございますの、お寄り下ないませな。』

『でも――。』と、俊彦は躊躇した。

『あなたが來て下さると、母もよろこびますわ。』

『でも――またこの次にします。』と、俊彦は辭退した。が、この儘別れて了ふのが俊彦は不本意だつた。同樣に房子も不本意だつた。それに房子は、姉の樣子を、俊彦の口から聞きたくもあつた。

『ぢや、私、そこまでお伴させていたゞきますわ。』房子は思ひ切つてかう言つた。そして、二人に跟いて步き出しながら、

『あの――。』と、俊彦に話しかけた。『姉さん、この頃、どんな風なんでございませう。』

『…………』俊彦は何か言はうとして口籠つた。その顏には、暗い影が動いた。

『身體の方は、どんな工合なのでございませう？』

『どうもよくないやうなんですよ。今日も朝から床に就いていらつしやるやうでした。』

『まあ。――そんなにお惡いの？』

『ひどく惡いつて程ぢやあないんでせう。』と、俊彦は、房子の驚きをなだめるやうに言つた。義

姉さんの病氣は身體ばかりぢやないのだ。義姉さんの苦しみは、身體よりも寧ろ心にあるのだ。その事を俊彦は房子に告げたかつたのである。俊彦の眼には、今朝、意地悪く母に小言を言はれて、部屋の隅に突伏して一人で泣いてゐた義姉の姿が浮んだ——。

二三町一緒になつてから、房子は俊彦に判れた。俊彦に別れて一人で途をあるきながらも、房子は自分の心が妙にそは〳〵と波立つてゐるのを意識せずにはゐられなかつた。偶然俊彦に會へた事が嬉しかつた。そして一言でも二言でも話が出來た事が、その話題のどんなものだつたかに拘はらず房子には嬉しかつた。何故こんなに嬉しいのか？ 房子にはわからなかつた。唯、何となく心が樂しく、おのづからなる歡びの譜が胸の底からかなで出でられるのである。たとへば、麗日の下に咲き亂れる花園の中にさまよひ入つたやうな心持がして、房子は恍惚としたあこがれのなかを歩いて行つた。

が、ふと房子の眼には、青ざめやつれた姉の咲子の顔が浮んだ。——房子は、心から姉にすまないと思つた。あの不仕合せな姉さんに對して、こんな浮々した心持になつたりする自分の心持

を申譯ないものに思はずにはゐられなかつた。

房子は、急に急ぎ足になつて、橋の袂の横町から家の方へ歩みを向けた。

家に歸ると、机の上に一通の手紙が置かれてあつた。姉からの手紙であつた。

《房子さん！

此間は御手紙ありがたう。すぐ御返事をあげようと思ひながら、つい、取紛れてゐました。堪忍してね。

今日は、頭痛がして、朝から床に就いて居ますの。おかあさまは、大へん御機嫌が悪いのですけれど、私、もうどうでもいゝつて氣がしますの。つまらない疑ひを掛けるならば、勝手におかけなさいつて氣になつてゐますの、私もう何も彼もつく〴〵いやになつて了ひました。いつその事、こんな家を出て了はうと私思ひますの。あとの事はどうにでもなるやうにならせるとして、私もう一刻もこんな家にゐるのがいやになりました。ねえ、房子さん、あなたど

う思つて？──いゝえ、房子さんは屹度、それはいけないつて仰有るんでせう。でも、私の身にもなつて頂戴、それはつらいのよ──』

文字も言葉も、たゞならずとりみだした姉の手紙を、房子は胸を轟かしながら讀んで行つた。

八　家　出

その日、房子は學校の歸りに友達に誘はれて、牛込の、その友達の家に寄つた。伊達秋子といふ、その友達は、房子より二級上の、もう來年の春は卒業するといふ人だつた。色の白い、ほつそりとした、美しいけれど何處か淋しい感じのするところなどが姉の咲子に似てゐたので、房子は、この伊達さんが好きだつた。秋子も房子を愛してゐた。二人の仲が餘り好いので、他の友達が嫉妬半分にいろ〳〵な事を──何の事だか判らないが、何となく顏が赤くなるやうなへんな事などを言つたりしたが、そんな事に構つてゐられないほど房子は伊達さんが好きだつたし、秋子も房子を愛してゐた。

が、近頃の房子は、前のやうに、無邪氣に秋子に甘えてばかりはゐられなかつた。小さい胸にあまるいろ〳〵の物思ひが彼女を苦しめた。彼女は、今や漸く人間の哀歡に眼ざめた。彼女の夢には、この現實の生活の、熱い、重苦しい息吹が通ひはじめた。細い後頸を伏せて──一人ひそかに泣いてゐる姉の咲子の姿や、うるみ輝くまなざしでぢつと自分を見てゐる俊彦の顏や──それから苦惱で喘ぐといふやうな調子で嘆息を吐きながら語つた圭次郎の言葉や──そんなものが、間斷なしに彼女の心に映つては消え、映つては消えるのであつた

秋子は女學校を出た後は、音樂學校に入つて、ゆく〳〵はピヤニストとして立たうといふ人だつた。富裕な實業家の妹娘で、牛込の高臺の宏荘な邸宅の、彼女の部屋には、大きなピアノや、立派な蓄音器などが具へられてゐた。

秋子は未だ練習が十分でないけれど──と言ひながら、新しい曲を二つばかり彈いて聞かせたり、蓄音器をかけて呉れたりした。そして、輕い疲れを長椅子に休めながら、女中の運んで來て呉れた紅茶を飲んでゐた時だつた。秋子は、のみさしの紅茶茶碗を卓の上に置くと、ふと、から

房子に言ひかけた。

『房子さん。あんた、この頃何か考へ事をしていらつしやるわね。』

『あら、なぜ？』房子は、秋子の聰い眼をおど／＼と見迎へながら、思はず赧くなつた。

『でも、そんな風に見えてよ。』

『あら、——でも、私何も考へてなどゐやしませんわ。』

『隱さなくてもいゝのよ。』と、秋子は大人びた微笑を口もとに浮べて、『何人だつていろ／＼と考へる事があるものだわ。年をとるのはいやね。世の中の事でも、自分の心の中の事でも、年をとるにつれて、次第に面倒臭いものになるのよ。どうしていゝか判らない事があとからあとからと出てくるのよ。』

そんな風に言ふ秋子も、物惱ましげな樣子だつた。秋子も、いつの間にか前のやうな快活な人ではなくなつてゐた。

『姉さんも、丁度、そんな事を言つてましたわ。』と房子は、つぶやくやうに言つた。

『房子さんの姉さん、どうしていらつしつて？』と秋子は訊いた。あの不幸な姉について、房子は、前に一寸秋子に話した事があつた。

『相變らず、苦しんでゐるやうですわ。』

『お嫁さんなどに行くもんぢや無いわね。』

『えゝ。』と房子もうなづいた。

そんな事を話してゐるうちに、房子は何となく落着かない氣持になつて來た。この間の姉の手紙に對して細々とした慰めの手紙を書き送つておいたが、それから些とも便りが無い事を考へたりすると、妙に姉の身の上が氣になつて來た。姉さんは、今、どうしてゐるか知ら？　ひとりで泣いてゐる姉の顏が、さうして秋子と話してゐるうちにも、ちら／＼と眼前にちらつくやうな氣がした。

未だいゝでせう——と言つて秋子が引きとめるのを振切るやうにして、房子は、秋子の家を辭した。歸りに一寸小石川へ寄つて見ようか知ら？　妹が姉を訪ねて行くのに何の不思議があら

う？

然うだ。今日はこれから小石川の姉を訪ねて見ようと、房子は水道橋の停留所に來ると、思ひ切つて巣鴨行に乘換へた。が、電車に乘ると　へんに胸が騷いで來た。そして氣がついて見ると、房子は、いつの間にか、青ざめ涙ぐんだ姉の顏の代りに、あの俊彦の男らしい面影をしつかりと、胸に抱くやうにしてゐた。さういふ自分に氣が着くと、房子は、深い恥を心に感じた。私は姉さんに逢ひたいのか知ら？　姉さんに逢ひたいのもうそでは無い。けれども、本當はあの人に逢ひ度いのぢや無いか知ら？

掃除町まで來ると、房子は電車を降りて了つた。そして、そこからもと來た方へ行く電車に乘つた。――房子は恥の爲に一人で赤くなつた。自分自身が、許されがたいいたづらな女のやうな氣がした。

家に歸つたのは、もう點灯時に近い頃だつた。

ぼんやりと茶の間に坐つてゐた母は、

『唯今！』と、房子が挨拶するより早く、

『大へんな事が出來たのだよ。』とだしぬけに言つた。うす暗い部屋の中に、不安にをのゝく母の眼が大きくみひらかれてゐた。

『なんなの？　お母さま。』房子も聲をはづまして言つた。

『この手紙を御覽。』

母のさし出したのは、姉からの手紙だつた。上書には、母の名と房子の名とが並べて書いてあつた。薄い鉛筆の色の慌たゞしい走り書の文字が、先づ啻ならぬ何ものかの氣配で房子の眼を脅かした。

わな〳〵とをのゝきの止まぬ指先で、房子は封筒の中からとり出した卷紙には、唯次のやうな簡單な文句が書きつけられてあつた。同じやうな、薄い鉛筆の色の、慌たゞしい走り書きで、

『私は、此の家を出て了はうと思ひます。もう、こんな家には一日も居るのがいやになりました。お母樣。房ちやん、どうぞ私の我儘を許して下さい。

咲子。』

『まあ！』房子は、その手紙と母の顏とを見くらべるやうに、そしてをのゝく聲をはげますやうにして、『この手紙いつ來ましたの？』

『今。たつた今だよ。家を出るなんて、本當に何といふ馬鹿な事を——』と、母は低く抑へるやうに言つた。

手紙の文句があまり簡單過ぎるが、兎に角家出の決心のもとに書かれた手紙であることは爭はれなかつた。房子は封筒の消印をしらべて見た。うすくかすれてゐて、はつきりとは讀み取れなかつたが、どうやら、「上野」と讀まれるやうだつた。小石川から出したものではない事だけは慥かだつた。とすれば——と、房子は、混亂する胸の中で考へた。家を出て、上野の停車場へ行つて、そこで書いた手紙らしい。上野の停車場から、何處へか行つたのかも知れない。

『おかあさま。かうしては居られませんわ。』

房子は、屹となつて言つた。

『私には、どうしていゝか判らない。房子、どうしたらいゝだらうね。』母はおろ／＼聲になつて、房子に言つた。

『おかあさま。私、圭さんとこへ見に行つてまゐりますわ。』

『圭次郎の處へ？』と、母は一寸腑に落ちぬといふ樣子で問ひ返したが、すぐに氣がついて、

『あゝ、ぢや、御苦勞だけど行つて來ておくれ。俥を呼ばせるから。』

『いゝのよ。そこまで行つて、私自分で乘りますから。』

房子は、袴をとつて、帶だけを締めかへると、小走りに走り出た。そして、近所の俥宿に驅けると、芝口の方の圭次郎の番地を言つて、大急ぎで行つて吳れるやうにと賴んだ。——俥の上に搖られ乍ら、房子の思ひは千々に亂れた。圭さんが一緒なのだ。姉さんは屹度、圭さんの處へ逃げて行つたのだ。そして圭さんと一緒にどこかへ姿をかくしたのだ。房子はさう思つた。これから圭さんの許へ訪ねて行つて、もし圭さんが家に居なければそれにきまつてゐる。だけど、姉さんも何と思ひ切つた事をしたものだらう。夫のある身が外の男と——まあ、何て怖ろしい！

こんな事にまで追ひつめられた姉の苦しい境遇に同情しながら、房子は、あまりに思ひ切つた、

あまりに大膽過ぎる姉の行動を非難せずにはゐられなかつた。

が、しかし、房子の想像は裏切られた。圭次郎は家に居た。俥を降りて、格子戸の内に驅け込むと、取次に出て來たのは、圭次郎自身であつた。

『やあ、房うちやん！ どうしたの、そんなに慌てゝ――』と、圭次郎は、例のにこやかな表情で愛想よく言ひかけた。

九 夜行列車

房子は、圭次郎の顏を見ると、ある安心を覺えた。圭次郎さんと一緒ぢやなかつた。まあ、宜かつた！ と思つた。が、次の刹那には、一層の心配に胸を締めつけられた。一人だつたとすれば、道德の上の過ちはない！ けれども、姉の身の上がそれだけ不安である。一人で、しかも、普通でない身體で、姉さんは一體どこへ行つたのであらう？――房子は、圭次郎の顏を見上げたまゝ、凍つたやうな顏をして玄關の土間に突立つてゐた。

『どうしたの？ 房うちやん！』圭次郎も、房子のたゞならぬ、樣子に驚かされて、息忙しく聞いた。

『こゝにはゐないのね？――圭さん、姉さんが來やしなくて？』

『姉さん！ 咲あちやんですか！』圭次郎は見る〳〵顏色を變へた。

『姉さんが家出をなすつたのですつて――。』房子は意氣地なく戰く聲を激ますやうにして、咲子の家出の始末を、簡單に圭次郎に告げた。そして、言ひ添へた。『手紙の消印は上野なのよ。だから、上野を出る汽車で、何處かへ行つたんぢやないかと思ふの？』

『兎に角、私もかうしちや居られない。一寸待つて下さい。』圭次郎は言ひ捨て、奧の方へひつこむと、すぐに着物を着換て出て來た。

『俥は返した方がいゝ。タクシーを呼ばう。』

圭次郎と、房子とは疾驅する自動車の中に向合つて坐つた。

『實はね、私んとこへも手紙が來たんです。けれども、ヒステリーか何か起して、氣紛れに書い

たんだらうと思つて氣にも留ずにゐたんだがね。──いゝえ、家出をするとは書いてなかつた。私は、何だかもう長く生きてはゐられさうもない氣がする。私が死んだら──なんて──。』そこまで話して、圭次郎は、寒い眼附をした。房子も、心臓の上に、氷を押當てられたやうな氣がした。死！ 姉さんは、若しか死ぬつもりなのではなからうか？

それきり、圭次郎は口を噤んでしまつた。二人は、唯、不安に戰く、眼を見合せるより外なかつた。

家に戻ると、思ひ掛けなくも、そこに俊彦が、いつか銀座で會つたあの書生を伴れて來てゐた。俊彦は、奥の間の火鉢の傍にきちんと坐つて、母と對ひ合つてゐた。俊彦の顔も蒼白く緊張してゐた。

『お歸りかえ？』茶の間の方に立つて來た母は、心配にふるへる眼で、房子と圭次郎との顔を代る代る見ながら『咲子は行つてなかつたかえ？』と、聲をひそめて聞いた。圭次郎は、默つてこツくりをした。

『小石川から坊ちやんが見えたんだがね。此方へでも來てはゐないかつてね。今朝の十時過ぎに出たといふ事だがね。』

『困つた事になりましたなあ！』圭次郎は、長火鉢の傍に、ぺたりと坐つて嘆息と共に言つた。

『坊ちやんが、仰有るにはね。仙臺のお友達──池田さんて方と、時々手紙のやりとりをしてゐたといふ事ですがね。若しや、そのお友達の許へでも行つたのぢやないかと私は思ふんだがね。池田さんていふのは、慥か花川戸の丸新のお孃樣のお嫁入先ぢやなかつたかえ？ 房子はよく知つてゐるだらう？』

『さうだわ。花川戸の鈴村さんだわ。──姉さんの學校時代には一番仲の好かつたお友達なのよ。ぢや、屹度さうだわ。』房子は、漸く一道の光明を望み得た氣がした。彼女の聲はよろこびに踊つた。それに違ひない！ それに違ひない！ 彼女は、もうそれに定めて了つた。

『さうだといゝがね。』と、母も稍々眉を明るくして、『ぢや、早速、そつちの方に人をやつて見ませう。』

『人をやるまでもないわ。お母様。私が行くわ！　私が行つて、姉さんを伴れて來るわ。』と房子は勇み立つた。

『だつて、お前。お前見たいな子供が——仙臺と云へば、ちよつとで行けるところではなからうがね。』

『なら、圭さんに一緒に行つて頂くわ。』と、言つたが、言つて了つてから房子はこの事件に就ての、圭次郎の立場に氣が附いた。

『私はいけない！　房ちやん、宜しく賴みます。』圭次郎は、あり〳〵と苦惱の表情を見せた眼で、哀願するやうに房子の顏を見上げた。

『さうだつたわね。』と、房子は詫びるやうに圭次郎を見て、『大丈夫よ。圭さん！　姉さんは屹度無事で歸つて來てよ。いゝえ。屹度私が伴れて來ますわ。』

『賴むよ、房うちやん。咲あちやんに若しもの事があると、私あ、私あ——』と、圭次郎ははらはらと淚を落して、『こゝのをばさんに對しても、本當に申譯はないんだからね。』

『大丈夫よ。圭さん。そんなに心配なさる事はなくてよ。』と、房子も淚ぐんだ。——母はと見ると、矢張、赤くなつた眼頭を襦袢の袖で抑へつけ、抑へつけしてゐた。

房子は、奧の間へはひつて行つた。俊彥の顏を見ると、こんな場合にしろ、矢張頰が熱くならずにはゐなかつた。房子は、大人びた調子で、丁寧に挨拶した。

『本當に、とんだ御心配をかけまして——』そんな風に言ふと、俊彥は、困つた樣な顏をして、つゞけさまに、頭ばかり下げるのであつた。

そこへ母もはひつて來て、今夜、これからすぐに人を仙臺へやつて見る。遠緣にあたる者で、心安くしてゐる人があるから、それに房子をつけて、今夜の十二時發で仙臺へ立たせるつもり故、お宅の方からも、どなたか人を出して貰ひたいといふ意味の事を、俊彥に告げた。俊彥は、委細承知して歸つて行つた。

『本當におちついたいゝ息子さんだね。あのお子は、房子にもよくしてお呉れだといふ事だが——』と、母は長火鉢の前にぐつたり坐ると、獨言のやうに斯う言つた。仙臺といふあたりがつい

たので、幾分ほつとした樣子ではあるが、しかし、母の心がいかに激しい心配で搔き亂されてゐるかは、煙管をとりあげた指先の、わな〳〵とふるへるのにも見てとれた。

『をばさん！』と、先刻から石像のやうにぢつとうなだれてゐた圭次郎は、房子の母の顏を見あげて、

『もしも、咲あちやんの身の上に變があつたら、私も生きちやゐないつもりですよ。』と言つた。

『何を馬鹿な事を言ふのですよ。』母は強くはねつるやうに言つたが、母の眼にも再び淚がたまつてゐた。

『圭さん。心配なさらないでも大丈夫よ。ね、大丈夫よ。』と、房子は、蒼白めた頰にはら〳〵と淚をこぼす圭次郎の肩に手をかけるやうにして、やさしくなぐさめるのであつた。

『ありがたう。ありがたう。』と、圭次郎は素直にうなづいた。

『大丈夫だから、心配しないでいらつしやい。お母さんも――。あら、もう九時半よ。急いで仕度をしなきや。圭さん、ぢやすみませんが、槇町の小父さんを呼んで來て下さいな。』

房子は、母の指圖をも待たずに、簞笥の曳出を明けて、甲斐々々しく、旅の仕度にとりかゝつた。

紺の股引に鼠色の道行を着て、同じ色の利休帽子を被つた槇町の小父さんと一緒に、姉のを直したセルの上衣に、もう秋も半の奧州路の寒さの爲めに毛の襟卷を、小さな化粧袋と共に抱た房子が、上野の停車場へ行つたのは、十二時二十分ばかり前であつた。小石川の方からも何人か來る事になつてゐる。その人とは、二等待合室に落合ふ筈になつてゐたので、先づ第一にそこへ行つて見ると、そこには、意外にも、俊彦が待つてゐた。

『まあ、あなたが行つて下さいますの！』と、房子は、思ひがけないうれしさの爲に、遠慮を忘れて言つた。

『えゝ。心配ですから――僕が自分で行きます。』俊彦は稍々はにかみの色をみせながらも、はつきりとかう言つた。

『あなたがお迎へに行つて下されば、姉さんも屹度歸つて下さいますわ。』それはお世辭ではなかつた。他の人の十人が行つたよりも、この人の一人が力強い。房子は心からさう思つた。

槇町の小父さんも、柔和な眼尻に深い皺をよせて、

『これは、これは、小石川のお坊つちやまでございますか？御苦勞でございます。』と、にこ〳〵しながら挨拶した。

やがて發車の時刻になつた。房子達の乘込んだ二等室は、幸ひ、隙いてゐた。

『こりや、いゝあんばい。わしは此方で一眠りやりますわい。』などと言ひながら、槇町の小父さんは、二人の向ひ側の坐褥に毛布をひろげてその上に坐り込むと、ふう〳〵と空氣枕をふくらまし初めた。

『私は、眠れさうもないわ。』それを見て、房子が一人言のやうに言ふと、

『僕も――』と、俊彦が言つた。さう言つた拍子に、二人はどちらからともなく顏を見合せた。そして、思はず微笑した。

『俊彦樣！』と、房子は呼びかけた。『俊彦』といふ言葉が、言ひにくい言葉が、極めて自然に言へたのが房子にはうれしかつた。『あの、思ひがけない事になるものですわねえ。』

『え？』俊彦は反問するやうにした。

『こんな、こんな汽車に乘るなんて――』それだけ言つて房子は止めた。それだけでは意味を成さなかつた。房子は、こんな風に言ひたかつたのであつた。『あなたと御一緒にこんな汽車に乘るなんて、本當に思ひがけない事になるものですわねえ。』

十　姉の言葉

二人はお互に澤山話したい事があるやうな氣がした。併し、どんな風に緒を引き出していゝかが判らないので、矢張、きまり惡く押默つてゐるより外なかつた。

大宮を過ぎる頃には、同車の人達も、皆思ひ〳〵の姿勢で眠り入つて了つた。中でも、槇町の小父さんは、汽車の音にも紛れない位の、大きな鼾聲を立てはじめてゐた。

『まあ！　大きな鼾ね。』房子が、俊彦の顔を見ながら、かう言つて微笑すると、俊彦も微笑を返した。

俊彦は、ポケットから何か小形の本を出して、讀んでゐた。何の本か知ら？　裏返した表紙のところをそつとつぞき込むやうにしたが、はつきりとは讀み取れなかつた。俊彦は、一心に讀んでゐる。一心に讀んでゐるやうに見えても、實は、何にも讀んではゐない。俊彦は、皆寢てしまつてゐる車室の中に、房子と唯二人だけが起きてゐて默つてむかひあつてゐる——その息づまるやうなへんな氣持を紛らす爲に、本を眼の前にひろげて、讀むまねをしてゐるのである。が、房子はさうとは知らないから、傍に居る自分の事などは何とも思はずに、讀書に夢中になつてゐる俊彦に對して、一寸腹立たしい氣がした。そんな本などを止めて了つて、此方をお向きなさいな！　然う言つてやりたい氣がした。そのくせ、本を止めて、此方を向かれゝば、唯赤くなつておどおどする外仕方がないに違ひないが——。

房子は、そこで負けない氣を起して、自分も本を讀まうと思ひ立つた。そして、網棚の上のバ

スケットをおろさうとしたが、あとから乘り込んだ客の大きなスウトケエスの下になつてゐるので、うまくそれがおろせない。——すると、俊彦がすつくと立つて、

『これおろすんですか？』と言ひながら、スウトケエスの下からバスケットを、拔き出して呉れた。

『憚りさま。どうもありがたうございます。』と房子は禮を言つた。

バスケットの中に、どんな本がはひつてゐたか？　あけて見る迄は判らなかつた。本など讀んでゐられるやうな呑氣な旅ではないやうな氣がしたが、それでもと思ひ返して、机の上に、のつてゐた二三冊を、無造作にバスケットに押し込んで置いたのである。明けて見ると、一冊は「海の嘆き」といふ佛蘭西の小說の飜譯で、一冊はSといふ詩人の「×××」といふ詩集だつた。桃色の裝幀の詩集の方を房子は膝の上にのせて、手あたりに頁を開いて見ると、丁度、中で一番好きな「なげきたまひそ」といふ詩のところが出た。

なげきたまひそ、はかなきは
この世の戀の性なれば。
怨みたまひそ、別るゝは
あひ見し者のつねならば。
仰ぎたまへな、夕月は
こよひもいかに冴かなる。

房子は、しかし、讀んでゐると、妙に胸騒がしい氣がした。もう暗記する程くりかへして、いつもながら、聲に出して口ずさんだりするその詩の文句が、思ひがけなくも、ある羞恥として、あるかなしみに似た感じとを彼女の胸に喚んだのである。今まで、その美しい詩句と、滑かな聲

調に魅せられて、何氣なく繰返してゐたその詩の一句一句が、今はつきりとした意味を帶びて、彼女の心臓を撃つのである。——兎に角、俊彦の前では、房子は、それを讀むに堪へない氣がした。房子は、ぱつたりと音を立てゝ頁を閉ぢると、そつとそれを膝の脇に置いた。

俊彦は、さすがに、讀み飽きたと見えて、いや、讀む眞似に疲れたと見えて、本を膝の上におくと、生欠伸を嚙みながら、房子に微笑を送つた。そして、てれかくしのやうな調子で、

『今、どの邊でせうね？』と言つた。

『さあ？』と、房子は一寸首を傾げて、『もう、宇都宮あたりではないでせうか？』

『今、鐵橋を渡りましたね。あれが——K川でせう？　さうですね。もうすぐ宇都宮ですね。』

『えゝ。』

『あなたは、お眠くない？』房子は、微笑しながら聞いた。

『さあ、何だか寒くなりましたね。何だか少し眠くなりました。』

『少しお眠りあそばせ。』

『ぢや、少し寢て見ませうか？　何だか眠れさうもありませんが。』

俊彦が、外套のまゝ、毛布に包まれて横になつたのを見ると、房子も、身體を斜に、座褥の凭れに背を寄せるやうにして眼を閉ぢた。晝間からの疲れが、丁度よいほどの緩やかな汽車の動搖に搖り出されて、房子は次第に眠りに、眠りの中に誘ひ入れられて行つた。本當の眠りが眞黒なものとすれば、灰色か鼠色位の淺い眠りに、うつら〳〵とぼかされた意識の表面を、銀の絲か何かで刺繍でもするやうに、時々、驛の名を呼ぶ驛夫の聲がきこえた。

郡山あたりに來ると、しづ〳〵と車窓が白んで來た。福島に來た時は、車中の人々も皆起き出した。そして、先づ俊彦が眼覺め、槇町の小父さんも、大きな伸をしながら、座褥の上に身を起した。

『やあ、よく寢た。寢た。』と、小父さんは、しよぼ〳〵した眼をしばだたいて笑つた。

『僕も、よく眠りましたよ。』と、俊彦も、すが〳〵しい朝の空氣に、頰をあてながら言つた。

汽車が北に進むにつれて、寒さは益々加はつてゐた。車窓から見やる野山には、色づいた萩の枝が女の髪のやうに搖れてゐた。安達太郎の頂きには、もう雪が來て、それが仄かな銀をきらめかしてゐた。

仙臺の驛につくと、三人はすぐに俥を傭うて、××町××番地の池田といふ家までと命じた。池田の家はすぐ判つた。廣瀬川を隔てゝ青葉城の城の櫓が綠の木の間に眺めやられる櫻が岡の公園の、すぐ傍だつた。一寸、はひつて行くのが氣遲れする位の、この地方の都會には珍らしい宏荘な邸だつたが、無人らしく、しんかんと靜まり返つてゐた。

想像は誤らなかつた。咲子は、昨日の朝、だしぬけに訪ねて來て、そのまゝ發熱して、殆ど人事不省の状態で病褥に就いてゐるといふ事だつた。

『本當にどうしたといふのでございませう。昨日の朝、だしぬけに訪ねていらしつて、もう東京へは歸らないから、すこしの間、置いて呉れと仰言いますの。來て下すつた事は嬉しうございます

し、置いて上げるだんではございませんが、どうしてまあ、突然に家を出てお了ひになつたの、その理由を聞かして下さいと申上げますと、唯泣いてばかりいらしつて、何も話して下さらず、唯、もう東京へは歸らないつもりだとばかり仰言いますの？』と若夫人の絹子――もとの、花川戸の鈴村さんは、三人の顔を代る〲見ながら語るのであつた。『それに、もう、ひどく疲れて、そんな話をしていらつしやるうち、今にもばつたりと倒れてお了ひになるやうな御樣子なので、兎も角もと、床を取つておやすませ致しますと、それきり、ひどいお熱で、まだ四十度近くでございますの、私、もう、どうしたら宜らうと困つて了ひまして、宅とも相談の上、今朝お宅の方へ電報をおうちしたのでございますの。』

『いや、どうも飛んだお騷がせを仕りまして――多分此方樣だらうと存じまして、かうしてお伺ひ致しました次第でございますが、へい、何ともどうも、とんだ御迷惑樣で、へい、へい――』

と、槇町の小父さんは連りに頭を下げるのであつた。

「絹子の言ふには、兎に角、もうすこし、熱でも下らなければ、どうする事も出來ないから、す

ぐ連れて歸るなどといはずに、このまゝ暫く靜養させて置いて貰ひたい。それに何しろ、今は非常に興奮してゐるから、意見がましい事は言はぬやうに――との事だつた。

『何だか、よく事情は判りませんけど、咲子さんは、隨分お苦しみなすつてらつしやるやうでございますわ。私、三年振りでお目にかゝつたのですけど、まるでむかしの面影はおあんなさらないんですもの。私、もう咲子さんがおいとしくて、おいとしくて――。今も、咲子さんの寢顔を眺めながら、ひとりで泣いて居たところでございますのよ。』と、涙脆い絹子は、もう一ぱい眼に涙を溜めてゐた。それを見ると、房子もつい泣けて了つた。

『いや、どうも――いやどうも――』と槇町の小父さんは、疎らに髯の生えた頤を撫でながら、呻るやうに繰返してゐた。

人數の割合には廣い家の、中庭を隔てゝ、絹子の部屋と鍵の手になつてゐる六疊の小部屋に咲子の病床がしつらへられてゐた。硝子戸越の日が、白い障子に漉されて明るく柔かくさし入る室の、程よい温度に調節された空氣には淡い藥の香が交つてゐた。枕もとにつゝましやかに坐つた

看護婦は、ぢつと病人の息づかひを聽き入るやうにしてゐたが、絹子に案内されてはひつて來た房子を見ると、すこし身をずさらせながら物靜かに會釋した。

咲子は敷布よりも青ざめた顏をして眠つてゐた。氷嚢の下に解きほぐされた髮は、黑い漆を流したやうに枕に亂れて、面變りがするほど、げつそり頰が削けてゐた。それを見た刹那、房子は『もう姉さんは駄目だ。』と思つた。濃い死の影が、刹那に房子の直覺に觸れたのだつた。

『まあ、姉さん！』房子は、べたりと枕もとに坐ると、危くわつと嘆き出して了ひさうになるのを、辛とがまんして、淚ぐむ眼で姉の寢顏を見つめた。

『何しろ、たゞのおからだでないんでせう。だから心配してゐるのですよ。』絹子はきづかはしげに言つて、『それにね、ひどく興奮していらしつて、謂はゞまあ、ヒステリーになつていらつしやるの、そして、これを房子さんにだけお話しておきますがね、どうも咲子さんの御樣子はへんなのよ。咲子さんのバックの中に、妙な小瓶がかくしてあつたのを私見つけましたの。それで、そつと取つて置きましたの。どうも毒藥らしいのよ。』

『毒藥。』と、房子は瞳ををのゝかした。

『えゝ。さうらしいの。思ひ詰めて短氣な事でもなすつちや困ると、私、それはそれは心配して居りましたのよ。』

『まあ、本當に困りますわ。』

やがて絹子が出て行つたあとへ、そつとはひつて來たのは、俊彥だつた。俊彥は、默つて房子の傍に坐つた。そつと見合はせられた二人の眼は、吸ひよせられたやうに咲子の寢顏にあつめられた。

そのうち、咲子が苦しげに脣をふるはしたと思ふと、悶えるやうに身體を動かし初めた。そして、看護婦と房子とが、一緒に膝をのり出した時、咲子は、ぽつかりと眼を開いた。――咲子は、大きく開いた眼で、眼の前の房子の顏を、それから、房子と並んでゐる俊彥の顏を見た。

『姉さん！』房子が、さう聲をかけると、

『あ、房ちやん！』と、咲子は言つた。さういひ乍らも、未だ、眼の前に見てゐるものが、現實

のものではなく、一つの幻影ではないかとうたがひでもするやうに、咲子の眼は尙ほぢつと房子を、それから俊彦を打戍るのであつた。

『義姉さん。』と、俊彦も、咲子の顏をのぞき込むやうにして聲をかけた。

『あゝ、俊彦さんも來て下すつたのね。』やうやくすべてを了解したやうに、咲子は言つた。そして眼を閉ぢて、

『すみません、すみません！』と繰返した。

『すまないわ、ほんとにすまないわ。』

『姉さん。阿母さんが心配していらつしやるのよ。私、お迎ひに來たのよ。』

『姉さん、御病氣がよくなつたら、私達と一緒に東京に歸りませう。ね。姉さん。』

『私、東京へは歸らない。』咲子は力なくかぶりを振つた。そして、言ひ續けた。『私、もう駄目なのよ。駄目なのよ。』

『あら、何故そんな事を仰言るの？』

『私、もうどこへも歸らないの！ 房ちやん、私は、屹度もう死んでよ。』

『そんな事を言つちやいけないわ。姉さん！』

『俊彦さん！』と、咲子は少し改まつた調子で俊彦に言ひかけた。『どうぞね、東京におかへりになつたら、お母樣にもお兄樣にも申上げて頂戴。もう咲は歸りませんと。どうぞ、御離緣になすつて下さいませと、お願ひです。あなたからさう申上げて下さいませ。』

俊彦は、何と答へていゝか判らなかつた。唯おしだまつて淚を呑むより外なかつた。

『俊彦さん。あなたには私何と言つて御禮を申上げていゝか判らないわ。あなたは私に深切にして下さいました。だから、私、山縣の家とは他人になつても、俊彦さんとは、矢張義姉弟で居たいと思つてゐましたわ。』咲子は、靑ざめた頰に淚を流しながら、交る〴〵二人の顏を見て、

『俊彦さん。どうぞ、房子とはいつまでも仲よくして上げて下さいな。御願ひですわ。いつまでも、いつまでもね——』

十一　仙臺にて

俊彦は、その夜の夜行で歸らなければならなかつた。槇町の小父さんも東京の方で心配してゐる母に樣子を告げる爲めに、俊彦と一緒に歸らなければならなかつた。

房子は、池田の女中を伴に連れて、二人を、停車場迄送つて行つた。

『では、わしはまた出直して來るからな。よく面倒を見てあげなさい。いろ〳〵と、よく氣を附けてな。』と、槇町の小父さんは、幾度も念を押した。

俊彦は、何も言はなかつた。何か重いもので胸を壓へられてゐる俊彦は、やるせなささうな眼つきをして、唯一人で考へ込んでゐた。

『御苦勞さまでしたはね。では、お家の方にどうぞよろしく。』房子が囁くやうに云ふと、

『どうぞ、義姉さんを――よろしく頼みます。』と、俊彦は小さい聲で云つた。俊彦の眼は、涙ぐんで、而して、感じ易くふるへてゐた。

『えゝ。大丈夫ですわ、すぐに東京に歸れると、私思ひますわ。』

『東京へ歸つても、もう僕の家に戻つては呉れないでせうね。』

『いゝえ。そんな事ないと思ひますわ。』

房子はさりげなく云ひはしたが、未來の事は覺束なかつた。姉さんはもう山縣の家には歸らないかも知れない。姉さんがこのまゝ御離縁になつて了へば、自分と俊彦さんとも、また從つてあかの他人になつて了はなければならない。ひよツとしたら、こゝで斯うしてお別れしたなり、もうこれつきり會へなくなる二人なのではなからうか？――ふと、そんな事を考へると、房子はたまらなく悲しくなつた。そのかなしみを強て打消すやうにして、房子は、俊彦の顔を見上げながら言つた。

『また、東京でお目にかゝりませうね。ほんとにあなたにはいろ〳〵御迷惑をおかけしてすみませんわ。』

『いゝえ。』

俊彦は、幽かに答へて頭を垂れた。

乘客達の混み合つてゐる發車前の停車場で房子と俊彦とは、お互に、もつと話し合ひたい澤山の言葉を、徒らにもだ〳〵と胸の中にうづまかせながら、肩を並べて立つてゐた。――が、そのうちに發車の時刻が來た。乘り込んだ汽車の窓から、俊彦は、さびしさうな顏を出して、窓の下に立つてゐる房子に別れを告げた。

『さやうなら。ぢや、お大事に。』

房子は、さう言つて別れを告げたが、――何だか、それが一生の別れになるのではないかといふやうな氣がして、走り行く汽車の姿を、見送る彼女の眼には、しづかにしづかに涙がたまつて來た。

『私、ひどくつかれてゐるんだわ。そのせゐで、こんなに妙な悲しい氣持になるんだわ。屹度さうだわ。』と、房子は自分で自身につぶやきながら、池田の女中と一緒に停車場を出た。夜は更けて、その東北の都會の空には寶石を碎いたやうな美しい星が、きら〳〵と輝いてゐた。風が寒く

頰を吹いた。

房子は姉の枕もとにつき切りにして、一生懸命に看護り續けた。もとからそこに弱點をもつてゐる胸部は、、再び肺炎をひきおこし、それが普通の身體ではないので、その上また精神上の苦悶がそれに加はつてゐるので、房子の病狀は、決して樂觀する事の出來ない狀態だつた。熱が高くなると、よく譫言を言つた。

『圭さん！　圭さん！』

とりとめもない譫言の中に、かういふ言葉をきゝつけると、房子ははッとした。――房子は、不幸な姉の戀を、しみ〴〵と考へて見ずにはゐられなかつた。

東京から、母を連れた槇町の小父さんが再びやつて來たのは、それから三日たつてからであつた。母達と前後して、山縣家からも、咲子の夫の代理として、中年の紳士が訪ねて來た。咲子は病狀さへ許せば、すぐにも東京へ連れ戻る筈であつたが、咲子のその後の容態では、とても、東京までの長い汽車に堪えられさうもなかつた。いや、すぐ近くの病院に移すのさへ氣づかはしい

ほどの容態になつてゐたが、丁度、小康を得たのを幸ひ、皆して相談の上、同じ町の、とある病院へ咲子の病床を移す事になつた。さういつまでも池田の家に厄介になつてゐるわけにも行かず又、病院でなければ十分の手當も出來なかつたので。

山縣の家からの代理で來た紳士は、咲子が病院に入るのを見屆けると、すぐに歸つて了つた。山縣家の冷淡な處置は、すつかり母を怒らせて了つた。

『さうとも、さうとも、もう、あんな家に、咲子を歸してやるものか？　よく〳〵辛い事があつたればこそ、咲子だつて家出なぞをしたんぢやないか？――だけど、咲子も咲子ぢやないか？　家出をする位なら、何故、おつかさんのところへ來なかつたんだらう？　こんな身重な身體を長い汽車に乘つたりして――本當に、この娘も馬鹿な娘だッちやないよ。』

母は、見るかげもなく病みやつれて了つた咲子の寢顏を眺めながら、かう云つて淚を流した。

それどころぢやあない。姉さんは自殺の覺悟までしたのだ。――しかし、その事は房子は母には云はなかつた。

咲子が病院に移つてから二三日經つてからであつた。房子は、東京の消印のある手紙を受取つた。署名は、たゞ『俊』と一字だけであつたが、その一字で、すぐにそれが俊彥からのだと判つた。房子は、胸の鼓動を、傍にゐる母に聽かれはしまいかとおそれながら、おづ〳〵指先で、その手紙を開いた。手紙には、次のやうな意味の事が記されてあつた。姉上の其後の御容體を心配してゐる。出來るなら、僕も、お側にゐて看護してあげたいのだが、思ふに任せない。兄や母がどんなに姉上を苦しめたか。それを思ふと、僕は心から姉上にすまない氣がする。姉上はもう僕の家へは戻つては下さらぬかと思ふと何よりも僕はそれが悲しい――。

そんな事が書かれた末に、

〈あの夜の汽車の中で、僕は一晩中眠れないで、いろ〳〵の事を考へ續けました。殘月の影がじろじろとA――川の瀨に碎けてゐるのを眺めながら、僕はひどく感傷的になつて終ひました仙臺はずゐぶん寒いですね。仙臺といふ町ははじめて行つたのですが、姉上の記憶により僕は一生忘れられない土地になるかも知れません。

何だかつまらない事を澤山書きました。これで失禮致します。呉々も姉上によろしく〵

さう書かれてあつた。はじめて貰ふ手紙にしては、かなり打解けた、親しみ深い書き方であつた。それが房子には嬉しかつた。顔を合せてゐると、ひどく素氣なく默り込んでゐる人が、手紙だと却てこんな風に打解けて呉れる——房子は、その手紙を通じて、俊彦の心に觸れ得たやうな氣がした。

『何處からのお手紙だえ？』

母が言つた。

『あの——お友達からのよ——』

房子は膝の上にひろげた書簡箋を兩方の袂で押しかくすやうにして言つた。

『お友達からのお手紙かえ？』

『えゝ。學校のお友達からのですわ。』

さううそを云つた時、房子は思はず赤くなつた。何故そのやうなうそをつかなければならない

か？小石川の俊彦さんからの手紙です——さう正直に答へたつて構はない筈ではなかつたか？房子は、善良な母の前に、自分の不正直な心を恥た。そして、重態の姉の枕もとで、つい〳〵、うつとりと甘く夢入つてゐるやうな自分に氣がつくと、姉さんに對してすまないと思ふのであつた。

十二　死の床

咲子の容態が益々惡くなつて、醫師の顔に不安の色が浮び初めたのは、病院へ移つてから十日程經つてからであつた。そして、母と房子との寢食を忘れての介抱も、とうとう甲斐がなく、それから二三日經つて咲子は全く危篤の狀態に陷ちて了つた。

『お母さん！　房うちやん！』左右からとり縋る母と妹とを交る〴〵呼びながら、不幸な咲子は、遂に歸らぬ人になつて了つた。東北の都會の秋は早くも更けて、病院の窓のポプラの黃ばんだ葉を、その日は、朝から冷たい雨が叩いてゐた。

『房うちやん！』もう息を引きとる一二分前だつた。死の際におとづれて來た不思議にはつきり

した意識で、咲子は房子に呼びかけた。

『圭さんによろしく——それから、俊彦さんによろしく——。どうぞ、幸福にお暮し下さるやうに——』

『姉さん！』房子は、さう言つて泣き沈むより外なかつた。

『泣かないで頂戴！　あんたが泣くと私も悲しくなるから——。私笑つて死にたいのよ。』と咲子は、その蝕まれた百合の花瓣のやうな顏に淋しい微笑を浮べるやうにした。そして、大きく見開くやうにした眼は、もう、全く別の世界を、將に彼女の前に開けようとしてゐるこの世の外の世界を見てゐる眼だつた。聖らかな、神々しいまでに澄んだ眼だつた。——が、その眼はやがて、永久に閉ぢられて了ふ時が來た。

『本當に苦勞しに生れて來たやうなもんだつた。——でも、咲子もこれでらくになつたといふものかも知れないね。』勝氣な母は、張り寄せる悲しみを強て押へるやうにして、そんな風に言つた。けれども、涙はあとからあとからとその老た眼から流れるのであつた。

危篤の電報にさすがにぢつとしてはゐられなくなつて、咲子の夫の山縣詮之助が東京からやつて來た時は、咲子は、もうこの世の人ではなかつた。面帕をとりのけて、その若い妻の死に顏を見た時は、この人情に鈍い冷たい性格の人も、さすがに涙を抑へる事が出來なかつた。——あなたは私に妻といふ名を負はせて、牢獄のやうな家庭に私を束縛しておきながら、些とも私を愛しては下さらなかつたのね。あなたの私にして下すつた事は、理由もない疑ひで私を苦しめ私の誇りをきずつけた事——たゞ、それだけでしたのね。疑はれた子は生ない爲に、私は、お腹の子をこのまゝ一緒に伴れて死んで行きます。あぢさゐ色に褪めた咲子の唇から、言葉なき言葉がこんな風の事を、その無情な夫に語つてゐるやうに思はれた。その言葉は、彼の胸にも犇々と徹へずにはゐなかつた。かはいさうな事をした！　濟まなかつた！　咲子の夫の詮之助は、その時、はじめてさう思つたのだつた。詮之助は、死床の傍に突立つたまゝ、しづかに頭を下げた。

その夜は、病院でお通夜をした。母、房子、詮之助、それから池田夫人、三度上京して來た槇町の小父さん、それに詮之助がつれて來た書生、——たつたそれだけの淋しいお通夜だつた。

母は、風邪を引いたと言つては、しきりに鼻をかんだ。鼻をかむふりをしては、淚を拭うた。

池田夫人は、重に房子を相手に咲子の女學生時代の追憶を語つた。女學校の三年の時新任の英語の先生に、未だ若い癖に頭髮のてら〳〵に禿けた人があつた。仕立屋と譯されるテエラアといふ單語を、その先生の禿に結びつけて覺えてゐた咲子は、テエラアの譯を先生から問はれると、勢ひよく「禿！」と答へて濟ましてゐたので、教場の全體が笑ひで爆發した事があつた。——房子を悲しみから救ふためにわざ〳〵そんな話を選んで聞かせて吳れた池田夫人は、笑ひながら、矢張、淚をこぼしてゐた。房子も笑ひながら淚をこぼした。あの憂鬱な姉にも、少女時代にはそんな快活の一面もあつたのだと思ふと、あまりに悲しかつた姉の一生が、今更のやうに思ひ返されるのであつた。

何を考へてゐるのか、咲子の夫の詮之助はぢつと瞑目したまゝ、木像のやうに一夜を亡妻の枕邊に坐り通した。

その夜が漸くしら〳〵と明ける頃に、看護婦が一人の來客を案內した。ひどく興奮した表情を

青ざめた顏に浮べて、慌たゞしい樣子でそこにはひつて來たのは、思ひ掛けなくも圭次郎であつた。一晩中一睡もせずに夜行列車に搖られ通したらしい圭次郎の眼は、一ぱいにたまつた淚の底から血走つてゐた。

『をばさん！ 房子さん！』と、圭次郎は前後を忘れたと云ふかたちで、さう呼びかけるなり二人の前に身體を投げつけるやうにした。

『まあ、圭次郎、お前來てお吳れだつたのかえ？』と、母は、傍にゐる詮之助の思惑を憚るやうにして言つた。

『來ちやわるかつたんですか？』と、圭次郎は突つ掛かるやうな調子で言つて、さて、咲子の死骸の方に眼をやつて『たうとう間に逢はなかつたんですね。どんな事をしてゞも、息のあるうちに一目、一目、私お會ひたかつたんです。小母さん、何故もつと早く私に知らせて下さらなかつたんです。』

——圭次郎の眼から淚が瀧のやうに流れた。

『まあ、お前、おちついてお呉れ！ それはね知らせようと思つたんだけれど——。』
と、母は途方に暮て、おろ〳〵聲で言つた。
圭次郎は、咲子の枕元ににじりよつて、面帕を拂ふと、その顏に自分の顏を押しつけるやうにして、
『咲あちやん！ 咲あちやん！ お前、とうとう死んで了つたのかい？ たうとう死んで——。』
と、齒を喰ひしばるやうにして咽び入るのであつた。
『圭次郎！ まあ、お前——』詮之助に氣を兼ねる母は、悲しみ亂れる圭次郎に手をかけて
『まあ、お前、そんなに、そんなに——。』
『をばさん！』と、圭次郎は、屹と伯母の顏を睨みつけるやうにした眼を、詮之助の方に移して
『をばさんは、この人の前に遠慮をなすつてゐるのでせう？ 何をくそツ！ この男は咲子の一生を滅茶苦茶にした、謂はゞ咲子さんの敵なんぢやないか？ ありもしない事を疑つたりして咲子さんを苦しめて——咲子さんがこんな事になつたも、皆、皆、お前のせゐなんだ！』

圭次郎は、さう言つて詮之助の前ににじり寄るやうにした。詮之助も稍氣色喰んだが、唇を嚙んだまゝ、別に言ひかへさうとはしなかつた。一座は、すつかり白け切つて了つた。
『圭さん！ 圭さん！』と、房子は、そのはら〳〵する眼で、圭次郎に取縋るやうにした。
『房うちやん！ まあ、言はせて下さい！ 私あ死んだ咲子さんの爲にもこれだけは是非言はずにや措けないんです！ ねえ、山縣さん！ あなたはへんな疑ひで、咲子さんを苦しめて、苦しみ死に死なせたんです！ 咲子さんとの間に、何かあつたやうに疑つて、それであんたは咲子さんを苦しめたんださうですが、咲子さんをそんな女だと思つて濟むと思ひますか？ 私だつて、私だつて——』と、圭次郎は頰の涙を荒々しく袖で拂ひながら『たとひ死ぬ程思つてゐたつて、人の奧樣になつた人に指だつてさしやあしないんだ。かはいがつてやりもしないで、疑ふだけは疑つて——そんな、そんなべらぼうな話があるもんか？ 山縣さん、學問も大事かも知れないが、人情つてものあもつと大事ですよ。——山縣さん！ 兎に角、こゝでへんな疑ひは取消して下さい。この咲子さんの屍骸の前につまらない疑ひをしてすみませんでした——と、あやまつて

下さい！ 私なんかどうでもいゝ。どんなに疑はれたつてかまはない。咲子さんは、純潔な女です！ その咲子さんを疑つちやすまない！ ね、山縣さん！』

『…………』咲子の夫の詮之助は、唯、力なく首を垂れてゐるより外なかつた。圭次郎の言葉は、自分の疑ひの誤つてゐた事を、しみ〴〵と詮之助に自覺させた。本當にすまなかつた――さう思ふ心が、詮之助の心を打碎いた。どう罵しられても、皆自分が悪いのだから仕方がないといふやうに、詮之助は、深く〳〵首を垂れて、亡妻の屍骸の前に慚謝の念を表はしたのであつた。

『あゝ、だけど今更そんな事言つてもはじまらない。房うちやん！ 咲ちやんはたうとう死んで了つたんだね。』圭次郎は、かう言ふと同時に、再び顔を抑へて、歯を喰ひしばつて男泣きに泣くのであつた。

『圭さん！ 圭さん！』と、房子も慰め兼ねて一緒に泣いて了つた。――見ると、母も、池田夫人も皆泣いてゐた。槇町の小父さんの鼻のあたまにも大粒な涙が、溜つては落、溜つては落してゐた。

十三　遠ざかり行く

咲子の遺骸が東京へ送り歸され、葬式がとり行はれたのは、美しい魂が天に還るにふさはしい清らかな、秋晴の日であつた。式はかなり盛大だつた。房子も　槇町の小父さんや亡骸を送つて東京に出て來た池田夫人や　その他此方側の人達の五六人と一緒にその式に列つた。房子の、悲しみに打ちしほれた白無垢姿は、殊に人目を惹いた。

羽織袴の禮裝で、ひどく大人びて見える俊彦の姿を、房子は、慌ただしい人の行き交ひの間に時時ちらと見かけたが、遠くから目禮をするだけで、口を利き合ふ機會はなかつた。あの時、仙臺から歸りの夜汽車で風邪を引いて、それから十日ばかり病床にゐて、そのために咲子の危篤の報知にも驅けつけてゆく事が出來なかつたのだと房子はあとで聞いた。いと〳〵青ざめて、面やつれのした樣子が、房子は氣にかゝつた。あの人も、心から姉の死を悲しんでゐて呉れるに違ひな

いと思ふと、一緒に手を執りあつて心ゆくまで泣いて見たいと、房子は思ふのであつた。

埋葬が濟んで、寺の本堂の兩側に居流れて、僧侶達の讀經に首を垂れながらも、房子は時々面をあげて、向ふ側に坐つてゐる俊彦の方に眼をやらずにはゐられなかつた。房子がそちらを見ると俊彦も屹度房子の方を見てゐた。語り合ひたい多くの多くの言葉をひそめて、もだく／＼と輝く四つの瞳は、さうして　人知れず何度も見交されたのであつた。

さうして、やがて　百箇日の佛事も濟む頃となると、房子の家と　俊彦の家との交渉は　次第に稀薄なものとなつて來た。從つて、二人はやがて路傍の人となる運命に日一日と近づいて行くのであつた。

さうかうしてゐるうちに、年もかはつて、やがて春が來た。房子の十八の春が來た。物なやましい、そのくせひどく滿ち足りない春が來た。

同時に女學校を卒業する日が、もう數へるばかりの日數の後に迫つて來た。

十四　春慌たゞし

房子は女學校を卒業した。音樂の教師は、房子がすぐれたソプラノの所有者である事を知つてゐるので、それをその儘朽ちさせる事をひどく惜んだが、而して、房子自身もずゐ分それを望みはしたが、家の事情はそれ以上の學生々活を續ける事を許さなかつた。昔氣質の母は、『そんな、お前、歌うたひなどになつて？』と何か卑しい藝人に身を落しでもするやうに考へて第一に反對だつた。女手一つで、種々の苦勞を凌いで、これまでにして呉れた母を考へれば、とりわけ、咲子の死でひどく力を落して、老後の望みを唯自分一人の上に掛けてゐる母を思へば、その望みを裏切つてまでも、自分の我儘を通す事は、房子には出來なかつた。房子も矢張、姉の咲子同樣、舊い女の一人でしか無かつた。

『ねえ、房子。』と、或る夜の事だつた。房子が自分の部屋で編み物をしてゐるところへ、母がはひつて來て、何事か思ひ入つた調子で話しかけた。『あの、圭次郎のことだがねえ。お前、あれを

何う思ふえ？』

『何う思ふつて、阿母さん。』房子は、何が無しに胸騷ぎを感じながら、斯う問ひ返した。母は、時時、こんな風にして、圭次郎の事を話しかける。その母の底意は、房子にも、うす〳〵勘附かれないわけでは無かつた。

『昨日も、お前の留守に來たんだよ。何でも亞米利加へ行くかも知れないなんて言つてたけれどね――。』

『まあ、圭さんが亞米利加へ？』

『日本にゐても詰まらないからなんて言つてましたよ。そんな遠い所へ行くのはおよしと私も留ては置いたけれど――あの、何だね、圭次郎は、咲子が死んだのですつかり力を落してゐるんだね。たとへ他の奧樣になつてでも生きてゐて呉れさへすりやつて、昨日も涙をこぼしてゐるんだよ。それほど咲子の事を思つてゐたのかと思ふと私、本當にかはいさうだよ。』

『本當に圭さんはお氣の毒ですわ。』房子も思はず引き入れられて、しんみりと言ふのであつた。

『私も、あの子に、そんな遠い處へ行かれては心細いし――そんな事は言はないで、お嫁さんでも貰つて落ついて呉れるやうにつて、呉々も言ひきかせたんだがね。』そこまで、話して來て、母の言葉は苦しく滯て了つた。

母が、その次に何を言はうとしたかを、房子は察してゐる。お前、圭次郎の許へ嫁つてやる氣は無いか？　さう、母は言ひ度いのである。

『あれはね、もう、獨身で過すつもりだなんて言つてゐるがね。』母は、重く、つぶやくやうに言ひ添へた。

――けれど、もし、自分がそれを承諾しさへすれば、圭次郎は喜んで自分を妻にするといふに違ひ無い。圭次郎の破れた胸を少しでも繕ひ得る者があるとしたら、それは自分でなければならない。――而して、母は、自分が然うする事を望んでゐるのだ。『あれで、圭次郎がもう少し學問でもある男だつたらね。』などと、ふと、口に出したりした事もある。

學問などはどうでもいゝ。自分も圭さんは嫌いぢや無いんだけれど――と、房子は、妙に物惱

ましい心の中で考へる。房子の眼の前には、何時の間にか、あの俊彦の顏が、悲しげな眼を瞠つて、遠くの方からぢつと自分を見てゐるやうな俊彦の顏が浮んでゐる――。

『ね、房子、ものは相談だがね――。』やがて、母は思ひ切つたやうに言ひ出した。

『阿母さん！』と、房子は、母の顏を見上げながら、遮るやうに言つた。『阿母さんの私に言はうとする事、私、わかつてゐるわ。大概わかつてるわ。でも、今は言はないで頂戴。後生だから今は言はないで頂戴。』

母は、一寸狼狽したやうな顏をしたが、

『さうかい？　ぢや、まああとの事にして置かうよ。』と、力なく微笑して、『いゝえね。決して無理にと言ふわけぢや無いんだがね、あんまり圭次郎がかはいさうなもんだから。』

母は溜息を一つすると、そつと立つて、足音を偸むやうにして部屋を出て行つた。

房子は、机の上に突伏して、二十分も三十分も顏をあげずにゐた。

『あら！　私、泣いてゐたのか知ら？』さう氣がついて顏を起した時は、房子の薄紅を帶びて火

照つた頰は、涙に濕つて、鬢の毛が三筋四筋粘りついてゐた。顏を押しあてゝゐた袖には、涙のしみが出來てゐた。

『馬鹿ね。私、泣いたりして。』房子は獨言いた。が、その傍からまた新しい涙が瞼の内側に突ッかけて來る。而して、睫毛を綴る彼女の視野を眞珠色にぼかして了つた。その眞珠色の隈取の中に、俊彦の顏がはつきりと描かれてゐるのであつた。

もう半年以上俊彦に會はない。姉の死は、二人の間を千里の遠きに隔てゝ了つた。あの人とももう他人なのだわ！　もう、永久にお目にかゝれる事は無いかも知れない――さう思ふと、房子は今更のやうにこの人の世の逢ひ別れのはかなさといふやうな事が考へられるのであつた。それにしても、俊彦さんは男では無いか？　女の私からはそんな事は出來ないけれどあの方は男なんだもの、手紙位下すつてもいゝ筈では無いか？　いゝえ、一度訪ねて來て下すつても別に惡い事はない筈なのに――と、房子には、恨みがましく考へられるのであつた。

圭次郎が、ふとした風邪のこぢれから、咲子と同じやうに肺炎になつて、僅十日間ばかり病んで死んだのは、丁度、咲子の一周忌が濟んだ頃であつた。

而して、房子が、丸ビルの或る會社に出てゐる高商出の若い紳士との婚約が成立したのは、それから間も無くの事であつた。房子が女學校を出る前後から、いろ〳〵の方面から持込まれた縁談は、十の指にも餘る程あつたけれど、一方に圭次郎の問題もあり、皆、お流れになつてゐたが最近、槇町の小父さんを介して申込まれた口には、母が先づ大へん乘氣になり、房子もたうとう拒み切る事が出來なかつた。で、話はする〳〵と運んで、來年の春早々結婚の式を擧げるといふ事に、案外速かに、寧ろ急轉直下とも云ふ可き勢ひで、萬事がとりきめられて了つたのであつた。さう話が決つても、房子には、まだ結婚といふ事實を、現實化する事が出來無かつた。何だかうそのやうな氣がした。すべてがあまり、慌たゞし過ぎて、まるで夢のやうだつた。

『本當にお前もねんねで困るねえ。』と或る時何かの事で母がやさしく笑ひながら房子をたしなめた事があつた。

『もう、お嫁さんに行かうつて人がそんな事でどうするのさ？』
『あら、私、お嫁さんになんぞ行かなくてよ。』
『そんな事を言つて、もう、お結納の日取まできまつてゐるぢやあ無いか？』
さう言はれて、今更のやうに、はつと氣がつくやうな、そんな房子の心持だつた。
『私、知らないわ！』と、房子は駄々を捏ねるやうに言つた。『私、いや！　いや！　お嫁になんぞ行くのいや！　おッかさんが勝手に決めたのだから――私、知らない、知らない！』
『今更、お前そんな事を言つて――。』母は、持餘すやうに苦笑した。
『知らない！　知らない！　私、いや！　私、いや！』房子は、ヒステリー染みた調子で叫び乍ら袖を顔に、そこに泣き伏して了つた。
『まあ、房子。お前どうおしだえ？』母は呆氣にとられたやうに、眼を瞠るのであつた。

十五　春の幻

麗らかに晴れた早春の日の、午後ももう夕暮近い頃であつた。一寸買物に出た序に、房子はふと思ひ立つて、傳通院の墓地にある咲子の墓をおとづれた。

その日、房子は島田に結つてゐた。間近に迫つたその日の爲に、髪を馴らして置かなければと母に言はれて、氣が進まないのを無理に結はせた髪だつた。房子の纖細い後頸はその結ひ馴れない髪の重味に、露を帶びた花びらのやうにうなだれてゐた。同じやうに彼女の心もある重味の下にうなだれて居た。身も心も輕やかな、自由な處女の日はもう去るのである。未だ遠い彼方にあると思つてゐた人妻の日は、もう眼の前に迫つてゐるのである。

房子は、あの恥かしい見合の席で、ちらと一目見た丈けの、その人の顏をそつと心に描いて見た。揉上の青々とした、眼の鋭い人だつた。つんと高い鼻、短い口髭、その口髭の蔭の冷たい微笑——それは、何かしら親しみにくいものを藏した微笑だつた。あの方、本當に槇町の小父さんの仰有るやうな良い人なのか知ら? 本當に私を愛して下さるか知ら? そんな風に考へると、房子は堪らなく不安だつた。而して、つい、うつかりと結婚を承諾して了つた自分の氣弱さが、

堪らなく呪はしいものに思はれるのであつた。——本當に、私、何故あの時、ことわつて了はなかつただらう? 阿母さんのいふやうに——なんて、何故、言つて了つたのだらう?。

『さう? それもいゝかも知れないけれど。少し脆過ぎたはね。私は、何處までも頑張り通すつもりよ。』その話をあの伊達さんに打明けた時、秋子が斯う言つて、憫れむやうに微笑した事を、今、房子は思ひ出したのであつた。

『本當に私弱かつたのよ。私も矢張死んだ姉さんと同じやうに、新時代ぢや無いわね。古い女だつたんだわね。』

『さうね。——でも、幸福がどちらにあるかは解らなくてよ。さうして、親の言ひつけ通り、おとなしく結婚する方が、却て幸福かも知れないわね。』秋子は、房子の打萎れた樣子を見ると、氣の毒になつたと見えて、慰めるやうに、こんな風に言つたのであつたが——。

——物思ひに耽つてゐるうちに、電車はやがて傳通院前に停つた。

門を潛つて、本堂の横手を裏の方へはひつて行くと、そこの崖上の一區劃が、墓地になつてゐ

て、その墓地の一番奥の方に、咲子の新墓が立つてゐるのであつた。

用意の香花を携へて、稍々泥濘氣味の墓地の土を、藤色の鼻緒のあづま下駄で靜かに踏んで行つた房子は、姉の墓を物色する爲にあげた眼を、激しい驚きの爲に瞬らなければならなかつた。何人も居ないと思つた墓地の中に、しかも、自分が訪ねる姉の墓の前に、ぢつと蹲まつてゐる人の姿を認めたので。その蹲まつてゐた人も、此方の氣配に氣がついたと見えて、立ちあがつて此方を振返つた。その顏を見ると、房子の驚きは更に倍加された。——思ひがけなくもそれは俊彦だつた。

『あら!』

『やあ!』二人の聲は、殆ど同時に二人の口から迸つた。

『まあ、あなたでございましたの。』俊彦の顏を見ると、胸一ぱいのなつかしさが一度に溢れ出て房子は我を忘れてかう言つた。

『やあ、久し振ですね。』と、俊彦も赤い顏をして言つた。——一年以上の月日を隔てゝ會つた二

人は、その月日のもたらした著るしい變化をお互の上に見た。房子がもう遠く少女の界を離れて來たやうに俊彦もまた立派に成熟した一個の青年だつた。大學の制帽をつけた俊彦の、稍々憂鬱な眉。稍々險しくやつれた頰——そこには、既に人生の現實に眼覺めた者のみが有つ惱みの色が動いてゐた。

『お墓詣りに來て下さいましたの。』房子は、今俊彦が手向けたらしい草花のほのかな色に、やり場に困る眼をやりながら言つた。

『えゝ、久し振で——。』

『私、おどろいて了ひましたわ。こゝであなたにお目にかゝれるなんて。』房子は、遠慮深く媚を含んだ調子で言つた。

『奇遇——いや、しかし、もつと早くお目にかゝれてもよかつたやうな氣がしますよ。』俊彦は考へ込むやうにして、

『僕、實は近いうちに外國へ行くのです。それで、今日は義姉さんにお暇乞ひのつもりで來たの

ですが、あなたにお目にかゝれて宜かつたと思ひます。』

『まあ、外國へ？』

『えゝ。佛蘭西へ行かうと思ひます。家も面白くないし、學校も面白くないもんですから。』俊彦は淋しく微笑した。

『まあ、何時いらつしやいますの？』房子は、縋るやうな眼で俊彦を見あげた。

『來月早々のつもりです。』

『どの位、いらつしやいますの？』

『さあ、そんな事は未だはつきりと決めて居りませんが――。』と、俊彦は言ひさして、一寸眼を足もとに落したが、その眼をあげると、『房子さんも御結婚なさるさうですね？。』

房子は、俊彦がどうしてそんな事まで知つてゐたのかと思ふと吃驚した。而して、そんな事を問ひかけたりする俊彦が、故意に意地悪く自分を苦しめるかのやうに思はれた。――房子は、何と答へていゝか解らないで、唯、赤くなつて押默つたまゝ、恨めしさに似たおもひで瞼の次第に

熱くなるのを感じてゐた。

『あなたの御幸福を祈りますよ。房子さん。僕は心から、あなたの幸福を祈りますよ。』

さう繰返す俊彦の言葉を、遠く聞きながら、房子は、抑へても抑へ切れない熱い涙のうちにかきくれてゆく自分の心をどうする事も出來なかつた。

房子は、歸りの電車の中でぼんやりと思ひ沈んでゐた。

あゝ、みんな夢だつたわ！夢よりもはかない幻だつたわ！――房子は、かう心の中に呟いた。

房子の胸には、潮のやうな悲しみが押寄せて來た。而してその悲しみが自分が長い間俊彦を戀してゐたのだといふ事を、今、初めてはつきりと房子に教へて呉れたのであつた。房子の胸には、あの愛誦の詩の句が浮んだ。

なげきたまひそ、はかなきは
春の幻――

この世の戀の性なれば。
怨みたまひそ、別るゝは
あひ見し者のつねなれば。
仰ぎたまへな、夕月は
こよひもいかに冴かなる。

影

一

その時分私は酷い神經衰弱になつてゐた。夜、眠れない私は、午前のうちだけは、鈍痛に襲はれ續けるぼんやりとした頭腦をもてあましながらも、兎に角生活の爲めの仕事として、安飜譯などの筆を執つて見るのだつたが、紙數にして二三枚も書くともうすつかり疲れて了ふのであつた。で、机の前にごろりと横はつて、枕もとにさし込む赤ちやけた陽や、うるさく眼口に、まつはる蠅の群などにみじめに神經をさいなまれながら、うつら〳〵と晝寢をするのであつた。考へるでも無く、眠るでもなく眠らないでもなく――その限りもなく長い夏の半日は、つく〴〵と生きてゐる事の呪はれる時間だつた。泥の中に喘ぐ鰌か何かのやうに、その狹い下宿の一間をのたうち廻りながら、私は、屢々、自殺の想念に誘惑された。面倒くさい！一思ひに死んで了はう！拳銃をこめかみにおしあてゝ、この腐つたやうな腦髓に、思ひ切つて二三發打ちこんでやつたら？――私は、まじめにそんな事を繰返して見るのであつた。

そんな風にして暮すうちに、やがて八月になつた。八月にはひつて間も無く、彼女——松井鈴子からハガキが來た。三崎から出したハガキで、三四日前からこちらへまゐつて居ります。毎日弟や妹達と海へはひつたりして樂しく暮して居ります——と、この島の海岸を撮した繪の餘白に書かれてあつた。而して片隅の方に一寸見ると見落して了ひさうな小さい文字で、御都合がよろしかつたらいらつしやいませんか、お待ちいたして居ります——と書かれてあつた。

その繪葉書を見ると、私はもうぢつとして居れなくなつた。

私は、疲れきつた頭腦で、まる三日間、働きづめに働きつゞけた。そして、百枚ばかりの原稿をこしらへると——勿論、それは誤譯だらけの飜譯だつたに違ひない——それをいくらかの金に換へて、たうとう鈴子のゐる海邊の町に出かける事にした。眼を開いてゐても、閉ぢてゐても、眠つてゐても、覺めてゐても、一刻と雖も私の念頭から去らない彼女の瞳、頰、唇——それ等のものを、幻影でなく、此の眼の前に見る事が出來るのだといふ希望に驅られて、靈岸島から、三崎通ひの小さな汽船に乘り込んだのは、鈴子の繪葉書を受けとつてから一週間ばかり經つてからの

ある日であつた。

その日は、よく晴れてゐた。汽船が東京の沖を離れて、半島の嘴崖を右手に望みつゝ、廣い海に出た頃に、——の上には、息つまらせるばかりの強い風が吹いてゐた。あまりに烈しい日光、あまりに蒼くあまりに廣い海——甲板の上に立つた私は、それ等のものに對して、今更のやうに自分の健康の衰へを知つた。私は、くるめかうとする眼を瞑り、よろめかうとする足を踏ん張り、胸を開いて、二つ三つ深い呼吸をした。

甲板の上には、澤山の人達がゐた。矢張、避暑に行く人達であらう、中形の浴衣に赤い帶をした若い娘達なども見られた。私はやがて船尾の方に行つて、輪に卷いた大綱の上に腰をおろしたが、ふと私のすぐ傍に、私と同じやうな格好をして、私と同じ方向を眺めてゐる一人の青年がゐるのに氣がついた。その青年に氣がついた時、私は何か知らはつとした。而して、妙に、その青年に心を惹かれた。

その青年のどんな點が、私の心を惹いたのかは、判らなかつた。特別に注意さる可き何もの

を、その青年がもつてゐたらう？——唯その私と同じやうに洗ひざらしの古浴衣を着、私と同じやうに赤ちやけた麥藁帽を被つた、私と同じやうに細くやせた後姿が、何となく斯う、覺束無けに、頼り無げに、而して、この盛んな日と海との輝きの中にゐながら、ひどく影が薄い感じに見えた。——私は、そのうしろ姿をぢつと見てゐるうちに、ある親しみの感じと、その親しみと同じ程度の強い反感とを同時に感じた。——兎に角、自分でもはつきりとわからない、そのくせ、かなり強い感じを、その青年から受取つたのは事實であつた。

しばらくしてから、私は、輕い眩暈を感じたので、船室の方に戻らうと、そこから立ちあがつた。すると、殆ど同時にその男も立ちあがつた。一緒に立ちあがる拍子に、はしなくも、二人の視線がぶつかつた。彼の顏は、蒼くやせてゐた。而して、病的な光りを含んだ大きな眼がおどおどとふるへてゐた。二人の視線は、合ふとすぐに外らされた。彼から先に外らしたか、私が先に外らしたかは、私にはわからない。が、その一秒の十分の一位の間の、ほんの刹那の一瞥にも拘はらず、彼の鋭い眼が、私の心に思つてゐる事の全部を看拔いて了つたやうに私には感じられ

た。私は、ひどく無氣味な氣持がして來た。

私が薄暗い船室に戻ると、彼も、同じ部屋に戻つて來た。私は、小さなバスケツトを枕にして、顏の上に帽子をのせて、うと／＼と眠りはじめた。うと／＼とした半意識の中で、私は、私の眼の前に、その男も亦、丁度私と同じやうに、小さなバスケツトを枕にして、顏の上に帽子をのせて眠つてゐる姿を見た——いや、見たと云ふよりも感じたといつた方が、いゝかも知れなかつた。

二

汽船が三崎の港に着いたのは、正午少し過ぎた頃だつた。甲板に立つて眺めやる彼方に、こんもりと緑に包まれた島の影を認めた時、私は、傍に立つてゐた中學生らしい詰襟の少年に問ひの眼を向けたところが、丁度その時、私のすぐうしろから、私の問はうとしたその同じ問を、その同じ少年に向つて發した者があつた。

『あれが、城が島ですか?』
妙にかすれた、力のない聲だつた。振返つて見ると、先刻の男だつた。
『さうです。城が島です。』と、中學生は元氣よく答へた。
やがて、島と向ひ合せに、丘陵を負うてごちやごちやと屋根々々を並べた三崎の町が現はれた。降りそゝぐやうな陽光の下に、その丘の緣は燃え、町の瓦や白壁は光り、埠頭にもやつてゐる和船や洋船の上に立働いてゐる人々の聲は、高く朗かに響いた。到着の笛を鳴らしながら船が止まると、埠頭から二三艘のはしけが渡された。棧橋の方には、迎へに出た人々が群れてゐた。ハンケチを振つて、はしけの中の人々に合圖をする者もあつた。
あの中に、鈴子も居はしなからうか。今日行くといふ事は知らせて置いたのだから、若しかすると迎へに出てゐるかも知れない。私はそはそはと落着かない心で、その方を見やつたが、鈴子らしい人は居なかつた。やがて、はしけが着いた。鈴子の姿は見えなかつた。あたり前だと思ひながらも、私は、一寸拍子拔けがした氣持がした。

私は、眼に觸れたまゝに、海に面した側の、未だ新築してから間も無いらしい旅館に宿をきめた。丁度、明いて居た二階の一間に通されて、帽子を脫いで、女中に渡さうとした時、私は、それが自分の帽子で無かつた事を發見した。船の中で何人かのととり違へて了つたのだ。何人かのと?――それがあのへんな男の帽子だと氣が附いた時、私は何とも言へないいやな氣がした。自分の傍に、自分と同じやうな麥藁帽子を被つた男はあの男の外居なかつた。どう考へて見ても、それはあの男の帽子に違ひ無い――。
が、そこから見渡せる爽やかな眺めは、私の心に落たその暗い影を直に搔き消して了つた。私は、欄干に倚つて涼しい風を浴び乍ら、鈴子の居る城が島の姿を貪り眺めた。梯形を平めた形のその島は、岩石の肌を半綠に被はせて、その緣の裾に二三十戶の漁家を埋めてゐた。而して、そこから扇形に展けた砂濱には、網が乾されたり、船が引きあげられたりして、その間に痕づけられた一條の路が、此方の岸の船着き場まで眞直に延びてゐた。その途をちらほらと動いて行く人の影までがはつきりと見てとられた。

影 ――

『あの島まで、どの位あるんですか。』と、私は、茶などを運んで來た女中に斯う訊くと、

『八町つて云ひますが、本當は五六町位のもんでせうよ。』と、女中はぞんざいな調子で云つた。

『船でどの位かゝります？』

『さあ、十分位でせう。』

私は、すぐにもその島へ渡つて見度かつたが、半日の航海でもうすつかり疲れ切つてゐた。少し休んでから――さう思つて私はそこに横になつたが、落着きの無い周圍の氣配に眠りを妨げられて、私はうつら〱と、半ば夢半ば現の重苦しい意識の中に二三時間を過ごした。

ふと、私は鈴子の聲を――何處かで『山岡さん！』と呼んでゐる鈴子の聲を聞いた。私は慌てて起きあがつた。而して耳をすましたが、何も聞え無かつた。矢張、例の幻覺だ――自ら嘲るやうに苦笑しながら、私は再びごろりとそこに横になつた。と、その時、女中がはひつて來て、私を訪ねて來たひとのある事を傳へた。女中と入れかはりに、部屋にはひつて來たのは、鈴子であつた。

『あゝ、やつと見つかつたわ！』鈴子は入口のところに立ちどまつて『とうとういらしつたのね。』とあでやかな笑ひを浮べた。

『どうして、僕がこゝに居る事が判つたんですか。』私は、思ひ掛け無い喜びに狼狽へながら、斯う云つた。

『一軒々々、聞いてあるいたのよ。』鈴子は、べたりとそこに坐りながら云つた。彼女は、中形の浴衣を着て、緋の帶を締めて、髪を後頭部で束ねてゐた。手に持つてゐた經木の海水帽に氣がつくと、

『あら、慌てゝこんなものを持つて來て。』と云つたが、それで赤く火照つた頰を煽ぐやうにしながら、

『發着所へ行つて、名簿を檢べて貰ひましたら、お名前があつたのよ。で、屹度此邊の宿屋へおとまりになつたことゝ思つて、片端から訊いて歩きましたの。早く見つかつて本當によかつたわ。』と、細い肩を搖るやうにして云つた。

『それは大へんでしたね。』

『でも、皆、訊いて廻つても宿屋は五六軒しか無いんですもの。』と、鈴子は事も無げに云つたが、鈴子がそれほどの心づくしを見せて呉れたかと思ふと、私はうれしかつた。鈴子は、少し色が黒くなつて、すこし痩せてゐたが、東京で見る鈴子よりも、ずつと活々として、ずつと人懐こかつた。

そこに運ばれた冷たい飲み料などを前にして、鈴子は樂しげに語つた。鈴子のその樂しげな調子は、私の心をも樂しく醉はせずには措かなかつた。だが、鈴子の話は、例に依つて、私の心持にとつては、あまりにかけ構ひの無さ過ぎる、あまりに單純に、あまりに無邪氣過ぎるものであつた。私は、小娘のやうに樂しげに語り續ける鈴子の美しい頰や、みづ〳〵しい瞳を、惱ましく打眺めながら、心の中に或る苛立を感じずにはゐられなかつた。

三

鈴子は、日が暮れてからも、平氣で話し込んでゐた。島への船は、十時頃まで出るから大丈夫だと云つた。監督者の手許から離れた者の自由な心持が、そのすべての樣子に見てとられた。鈴子は、一緒に來てゐる小さい妹達の事や、島の人々の事などを話した。今借りてゐる家の本家には、十二三になる少年がゐたのだが、その少年が、彼女の大きい方の妹に、少年らしい好意を寄せてゐて、妹がいひつける事はどんな事でも肯くといふこと、而して、『仙太、お前は東京のお孃樣におつ惚れてゐるな。』と隣のおぢさんにからかはれては、眞赤になつて怒るのだといふことを、彼女は面白さうに話してきかせた。

『そんなにお孃樣が好きなら、お孃樣にお嫁に來て貰へつて、うちのをばさんまでがからかふのよ。』すると、妹が面白がつて、

『えゝ、えゝ、私、仙太さんのお嫁さんになるわ。仙太さん、お嫁さんにして呉れて？　なんて——。そりや可笑しいつたらないのよ。』と、鈴子は笑ひくづれるのであつた。

『妹さん。おいくつなんですか？』と、私は思はず微笑させ乍ら訊いた。

『十五になりますの。年は十五ですけど、まるで子供のやうに無邪氣な面白い子なんですのよ。』
『何て云ふ名なんです？』
『千代子つていふんですの。』
『いゝ名だな。一度逢つて見度いな。』と、私が獨言のやうに云ふと、
『あなたの事はね。』と、鈴子は一寸嬌態をして、『お友達の兄さんだと云つておきますわ。明日、島にいらつしやるでせう？　私、九時頃からみんなしてうしろの濱に出てゐますわ。』
『うしろの濱つて、どこなんです？』
『あの島のむかふ側なのよ。いゝ景色ですわ。』と、鈴子は、そこへ行く道すぢなどを說明して、
『私、毎日、妹達をつれてそこへ遊びに行くのよ。いらつしやいな。』
『えゝ、行きますよ。毎日行きますよ。その代り、あなたも此方へ遊びに來て下さい。』
『えゝ、來ますわ。私、毎日、一度づつはお湯にはひりに此方へ渡つて來るんですの。——で、いつ頃まで此處にいらつしやる事が出來ますの？』

『さあ、一週間位居るつもりですけど。——いやになれば、二三日で歸るかも知れません。』と、私は、言葉にある意味をもたせて云つたつもりだつたが、鈴子は一向それに頓着無く、
『さう、屹度、お氣に入るだらうと思ひますわ。』と、その、今パッと開いたところといふやうな感じのする二つの眼を、私の顏に向けた。

夜に入つた海は、朧銀の波を疊んで、ところ〴〵に仄白く波頭を飜してゐた。その海の彼方に、こんもりと夜の色に包まれた城が島は、裾のあたりに三つ四つの灯影をちらつかせて、渚に碎ける波が、銀の繡で刺繡をしたやうに見えた。その島の一角に夜目にも著く、すつくと立つた燈臺の頂きからは、青白い灯が、幻怪的な淡い輝きを以て、さつと半空を刷いてゐた。その光の下にぼつと、煙るやうにひろがつた外洋の方には二三點の漁火が動いてゐた。肌寒いまで涼しい風が吹いて來た。

二人は、暫くその涼しい風を浴びながら海の景色に見入つてゐたが、鈴子は、ふと何者かに衝き動かされたやうに、

影 ——

『もう、歸らなきやいけませんわ！』と言つた。

もう九時を過ぎてゐるだらう。それ以上、引き止める事は出來なかつた。

『さうですか。ぢや、僕、島まで送つて行きませう。』

二人は宿を出た。雜貨店や氷屋などの灯影で明るくいろどられた。而して、漁師達や、店の女達などの朗かな土音や高い笑ひ聲やがそこともなく賑やかに聞えて來る狹い町筋を二三町歩いて、埠頭近くの、倉庫などの立ち並んだ片影の小徑を、二人は渡船の出る渚の方へと降りて行つた。

『さあ、お乘んなせい。』と船頭の爺さんに促されて、私達は船に乘つた。爺さんは、鉢卷をした小さな禿頭をつる〳〵と光らせながら、ゆつくりと櫓を動かした。ぎい〳〵と鳴る櫓の音につれて、船は滑るやうに海の上に出た。埠頭の方には、夜航の用意をしてゐる汽船が、赤い灯を舷頭に輝かして、その汽船の上からも、その傍に動いてゐる艀からも、人々の叫び聲が聞えた。それが次第に背後に遠ざかつて行くと、點々と續いた賑やかな町の灯も、眞珠色の靄の中に沈んで行

つて、反對に、近づいて來る島の灯が、次第に數を增して來るのであつた。

『私達のゐる所は、あそこなのよ。そら、此方から三番目に小さい灯が見えるでせう。あそこなのよ。』と、鈴子は、胴の間の棧に並んで腰を掛けた私に寄り添ふやうにして、その灯影の一つを指し示した。彼女の海水帽をはた〳〵と動かす海の風は、時々彼女の髮の毛を私の頰に吹きつけた。

『月が出ましたね。四日位でせうか？』私はさう云ひながら眼をあげた。紺青の空には、細い月が一つ懸かつてゐた。明るくもなければ暗くもないやうな、明るくもあれば暗くもあるやうな、妙に奧深い感じのする光が、空をも海をも包んでゐた。

『い〻晩ですわね。』と、鈴子はしつとりとした聲で云つた。鈴子のかぶつた經木の海水帽は、その深い廂で、彼女の眉のあたりを一層匂やかに見せ、彼女の瞳を一層魅力的なものに見せた。而して、そのすんなりとのびた頰から掛けて、顎の處で括られた紅い紐が、その顏にある媚かしい感じを與へてゐた。私は、吸ひ寄せられたやうに彼女の横顏に見入つた。ふと、彼女は顏を此方に

振り向けた。私は、あわてゝ眼を外らさうとしたが間に合はなかつた。

『本當にいゝ晩ですね。』と、私は、てれかくしのやうに云つた。

『これからだん／＼月が明るくなりますわ。月夜の濱はそれやあ良う御座んすわ。』鈴子はうつとりとした調子で云ひながら空を見上げた。淡い月の光に描き出された鈴子の顔は、あやしいまでに美しく見えた。寶石のやうに輝く瞳、濡れたやうに赤い唇、その物云ふ聲までが微妙なリズムを以て私の耳に響くのであつた。

私は、ある夢心地のうちに引き入れられ乍ら、此の船が、此のまゝ、何處までも何處までも私達を乘せて行つて吳れゝばいゝと思つた。が、そんな事を思つてゐる間に、船はもう向うの岸に着いて了つた。

『ぢや、失禮してよ。また、明日ね。』船が着くと、鈴子は斯う云ひながら、ひらりと渚にあがつた。

『大丈夫ですか。一人で？』と、私が云ふと、

『大丈夫よ。直ぐなんですから——。何人か此方へ來るやうよ。千いちやん達が迎ひに來たのかも知れないわ。ぢや、失禮してよ。』鈴子はさう云ひながら、はた／＼と跫音を立てゝ五六歩走り出したが、そこで一寸立止まつて、此方を振返つて微笑した。私は、鈴子の姿が砂濱の中の一筋道から、珊瑚樹か何かの、つや／＼と夜露に濡れた樹立の間に消えて了ふまで、ぼんやりと見送つてゐた。

『すぐお歸りなさるだあかね。』と、船頭が言つた。

『あゝ。』と私は夢から覺めたやうに答へた。

船が水際を離れようとした時だつた。浴衣を着た男が、水際に立つてゐるのに氣がついた船頭の爺さんは、

『お歸りなさるだあかね？』と聲をかけた。その男はうなづいたやうだつた。爺さんは船を返した。その男は船に乘つた。むかう向きになつてゐるので、どんな男か判らなかつた。

私は、再び町の方に漕ぎ返される船の中で、次第に遠ざかり行く島を、飽かず眺め返してゐた。

島の渚を縁取る白い波頭の中に、時々、きら〳〵ときらめく青い光りがあつた。

『あれは何だらう。あの青く光るのは？』私は爺さんに聞いた。

『夜光蟲だよ。』と爺さんが答へた。

その時、ふと、その男が、此方を向いた。その男の顏を見ると私ははツとした。それは、あの私の帽子をとりかへたへんな男に違ひ無かつた。私は、帽子の事を云ひ出さうとしたが、面倒くさいので止めた。面倒臭い――といふよりは、その男に口を利くのが私はいやだつた。何となく底氣味が惡かつた。その、憂欝な、蒼ざめた顏――それを見たばかりでも私はぞつとしたのだつた。

四

私は、その翌朝、朝飯を濟ますと、すぐに城が島に出かけて行つた。而して、その島の脊を越して、外洋に面した方の海岸――うしろの濱と呼ばれてゐる海岸に出た。そこは、犬の牙のやうな岩が、海の中にいくつも突き出してゐて沖から遠く捲き返して來る外洋の波が、高く水沫をあげてゐた。私は、そこで鈴子に逢ふ事が出來た。鈴子は二人の妹を連れて、そこにやつて來た。大きい妹の千代子は、鈴子によく似た美しい娘だつた。

私は、正午すこし過ぎまで、そこで鈴子と樂しい時を過す事が出來た。燈臺へ行く小徑には、潮風にいぢけた白百合や、輪の小さい撫子が咲いてゐた。鈴子は、その撫子を摘んで、花瓣を口にふくんだりした。私は、鈴子の眼にある情熱的な輝きを見たやうに思つた。妹たちを先にやつて、その人通りの無い小徑を二人肩を並べてあるき乍ら、今こそ、打明ける時だと思つた。――が、私には矢張、その勇氣が無かつた。長い間、胸の奧の方に藏つておいたその惱みを打出す爲めには、夏の日が、あまりに明るく輝き過ぎてゐた。私は、かうして毎日、朝飯を濟ますと、島へ出かけて行つた。そして、うしろの濱へ行つて、鈴子の來るのを待つた。鈴子は、どうかするとひどく私を待ちあぐませる事があつたが、必ず妹たちを連れてはやつて來た。もし、鈴子一人で來て呉れたら――と、私は、どんなにそれを望んでゐたらう。が、鈴子は、私の望みを叶へて

は呉れなかつた。――鈴子は、ます〳〵募りゆく私の焦躁と苦悶とにも拘はらず、妹たちと聲を揃へて、たのしげに歌などを歌つてゐた。

とは云へ、さうして毎日鈴子に會へるといふ事は、私にとつては此上もない喜びであつた。私は正午頃まで島にゐて、町へ歸つた。夕方になると、鈴子は町の湯に入るために妹たちと一緒に町へやつて來た。而して、その度毎に、私の宿を訪ねて呉れるのだつた。妹たちを伴れてゐるので初めての日のやうに、ゆつくりとしてはゐなかつたが、唯、一寸來て、一寸の間話して歸るだけだつたが、私がその鈴子の訪づれを、いかに待遠しく待つた事か！ 私は、長い暑い午後を、唯それを待つ爲めにばかり過したのであつた。鈴子は、夕方近く、すこし日の熱の衰へるのを待つてから、出かけて來るのだつたが、その頃になると私は欄干に身をよせて、島の船着場から漕ぎ出される船をあからめもせず打守つてゐるのだつた。白い浴衣、緋の帶、而してオリイヴ色の日傘――彼女の姿を、その船の中に見出すまで。

ところが、さうして一週間ばかり過してからの事だつた。

『今日は隨分波が高いのよ。もしかしたら、今夜あたり荒れるかも知れないつて、船頭のおぢいさん云つてましたわ。海が荒れると、船が出なくなるでせう。まるで島流し！ 隨分心細いわ。』鈴子が歸りがけにそんな風に云つてゐた。その夜から、果して海は荒れ出した。一晩中吼えつゞけてゐた暴風雨は翌日の朝になると、少し收まつたが、海の荒れはなか〳〵しづまらず、勿論城が島の渡船も絶えて了つた。而して、夜に入ると再び、暴風雨がやつて來た。

一日、鈴子を見ずにくらした私は、心がすつかり餓ゑて了つた。私は、しめきつた室の戸を細目に明けて、暗く荒れる海の彼方に覺束なくもきらめく島の灯を眺めた。左から三つ目のなつかしい灯！ 嵐の海を隔てゝ心細さうに瞬いてゐるその小さい灯！

その翌日、その翌々日も、ひきつゞいて荒れもやうだつた。海の上には船の影一つ見えず、島はひつそりと横たはつてゐた。

『まだ島へは渡れないだらうか？』私は、女中に訊いて見た。

『へえ。とても駄目でせう。』『明日になれば渡れるか知ら？』

『さあ、此分で凪げばいゝんですけど、何しろ波が高いんでね。』と、女中は云つた。

さうして、渡る事の出來ない島を眺めながら、私はまる三日を過した。私は、激しい心の飢から、私自身を支へる事が出來なかつた。私は、夜となく晝となく、眼前にちらつく鈴子の姿に苦しめられながら、眠る事も出來ず、食べる事も出來ないで、無限に長い刻々を、生命の緒が見る見るすり切られるやうな苛立たしさの中に過さねばならなかつた。

その次の日も、海は相變らず荒模樣だつた。

『今日も船は出ないか知ら？』

『さあ、むづかしいでせうね。』と、云つて、女中は、私の顏を見た。而して、妙な笑ひ方を笑ひながら、

『本當に意地の惡いお天氣ね。』と云つた。

『…………』『もう一日辛抱なさいよ。どんなに思つてもこれぢや駄目ですよ。』東京者だといふ女中は、何も彼も見拔いてゐるといふやうな小賢しい眼附をした。

私は、その夜も一心に島の灯を見つめながら、いつまでも起きてゐた。

その翌日――鈴子に會へなくなつてから六日目――は、前の日よりももつとひどい荒模樣だつた。勿論船は出なかつた。

全く離れてゐるならば、かうは心煎られまい。眼の前に、彼女のゐる島を見ながら、しかも彼女に逢へないといふ事が、物狂ほしいまでの苛立で私の心をかきむしるのであつた。私は、たまらなくなつて、町へ出て見た。それでなくてさへ狹い町は、ひきあげられた漁船の爲めに、處々身をそばめなければ通れないやうになつてゐた。氷を賣る店先などに、海に出られない漁師達が赤銅色の裸體を横たへて、何か大聲にわめきちらしてゐた。

私は、渡船場へ出た。而して、そこにうづくまつて、暗澹と暮ゆく海を眺めた。暗澹と暮ゆく海の彼方に、黒く横たはつてゐる島を眺めた。黒く横たはつてゐる島の裾にちら／＼ときらめき出した灯影を眺めた。

眺めてゐるうちに、私は、わけは無い渡らうと思へばすぐに渡れるぢやないか。こゝに船があ

る。この船に乘つて力の限り櫓を押しさへすれば——と思つた。私は、實際、そこに引きあげられてある船の傍につか〳〵と歩みよつて、その舷に手をかけて力一ぱい、それを動かして見た。——が、私は、すぐにその物狂ほしい發作に驅られてゐる自分に氣がついた。而して、何人か見てゐはしなかつたかと、そつとあたりを見廻した。

すると、私は、私のすぐ傍に、船の蔭にそつと身をひそめるやうにして蹲つてゐる一人の男の姿を見た。私は、はツとした、そのしよんぼりとした、やつれ果てた後姿は、たしかに、あの男に違ひないのだつた。而して、彼も亦、一心不亂に、暗くなつてゆく海を、海の彼方の島の姿を、島の裾の灯の影を見つめてゐるでは無いか?

私は、何か知ら、ぞつと脊筋が寒くなるやうな氣がした。彼は、もう一人の私を、そこに見つけたやうな氣がした。もう一人の私——だが、私は、たまらなくその男の姿が、無氣味なものに思はれた。

私は、そつと跫音をしのばして、その男の傍を離れた。その男がこちらを、振向いて、私の顏

を見ないうちに——。

五

その夜は、またひどく海が荒れ出した。こんなに、長い間、海が荒れる事は、近年にない事だと土地の人も云つてゐた。

夜が更けると共に暴風雨は益々強くなつた。そのぐわら〳〵と鳴る嵐の中に、港口の方から人人の叫び合ふ聲を幽かにきゝながら、私は、うつら〳〵と眠り難い一夜を明かした。私は、もう身體も心もすつかり疲れきつてゐた。そのくせ、眠る事が出來なかつた。夢ともないうつゝともない意識の中で、私は、暴風雨海に船を浮べて一生懸命に櫓を押してゐる自分の姿を見た。船は木の葉のやうに暴風雨に揉まれる。私はとうとう、船から搖り落されて了つた。あツと、聲をあげた拍子に眼が覺めると、それは夢だつた。私は、そのへんな夢をつゞけて二度までも見たのであつた。

あくる朝になると、暴風雨はしづまつたが、海はまだひどく荒れてゐた。その日の夕方、私はどうにもかうにももちあつかひ兼ねる身と心を運んで、海岸の渡船場の方へ出て見た。頭を垂れて、ふら〳〵と波打際を歩いてゐるとひた〳〵と寄せる波が、何か私の足もとに打ちあげたものがある。とりあげて見ると、それは一つの麥稈帽子だつた。よく見ると、あのへんな男にとりかへられた筈の私の帽子なのである。——？——？私の心臟は、或る不吉な感じではげしく躍りはじめたのであつた。

私は、しばらくの間、その帽子を手にしたまゝ、ぼんやりと立つてゐたが、ふと、五六丁向ふに黑く人だかりがして、がや〳〵と喚く聲が幽かにきこえて來るのに氣がついた。

『あれはどうしたのです？』と、折よく通りかゝつた二人連れの漁師に聞くと、

『土左衞門だよ。東京から來てゐるH館のお客ださうだ。』と一人が言つた。

『どんな人なんです。どうして海へはひつたんです？』私の聲はひどくふるへてゐた。

『丁度、あんた位の書生さんだよ。昨夜一人で船を漕ぎ出して、船がひつくりけツたんだともいふが、あの暴風雨に馬鹿な事をしたもんだよ。何處えまた、船なんか漕ぎ出したもんだやら——矢張、死ぬ覺悟で、そんな事をしたんだんべえ。』と、もう一人の漁師は嘲るやうに言つた。

それを聞くと、私は、全身に水を浴びせられたやうな氣がした。私は、兎に角、その人だかりのしてゐるところまで行つて見た。而して、岩の上に引上げられた男の死骸を、人々の肩越にのぞいて見た。もう、すつかり暗くなつてゐたので、はつきりとは判らなかつたが、その仰向けになつて、ぢつと眼を閉ぢた顏はあの男に違ひなかつた。

私は逃げるやうに宿に引きかへした。而してすぐに蒲團の中にもぐり込んで了つた。

——私は、その翌日、宿を引きあげて、陸路から東京へ引きかへして了つた。東京へ歸つた晩から、私はひどく熱を出した。私は、病院へ入れられた。

而して、運命といふものは實にわからないものだ！　私が、まだ病院から出ないうちに、鈴子は、急に、婚約がまとまつて、大阪の方へ去つて了つた。で、つまり、私は、あの暴風雨になる

前の日に三崎の宿で逢つたきり、それきり鈴子と逢へない事になつて了つたのであつた。

（大正一三、一一、一六）

幻を抱いて

一、お　七

「まあ、此の子は一體どうしたと云ふのだらう？」

針仕事の手もとを留守に、ぼんやりと眼の前の空間を見つめながら、又しても何か考へ込んでゐるお七を見ると、母親はかう心の中でつぶやいた。心の中でつぶやき乍ら、母親はぢつとお七の横顔を見た。もみあげのあたりから顎にかけて、すんなりと柔かい線をのべたその横顔には何時の間にか、としごろの娘にでなければ見られない、物なやましげな、憂鬱な表情が現はれてゐた。――さうだ。この娘ももう十六になつたのだと、母親は、今更のやうに娘の齢を數へて見て、何が無しに、ためいきを一つ吐いたのであつた。

「お七。」

母親は、さうしていつまでもぼんやりしてゐる娘の樣子を見ると、何ともいはれない或る不安に狩り立てられながら、かう呼びかけた。

「何あに？　お母さま。」

お七は、驚いたやうに顔をあげた。長い睫毛の蔭の二つの瞳は、未だ深い夢に溺れてゐるやうに見える。

「何をお前、考へ込んでゐるのさ。」

「あら、私。」と、お七は心持頬を赧めたが、その眼は既に僞ることを知つた者の、愛らしい狡猾さですばやく動かしながら、「私何にも考へてなど居やしませんわ。」

「考へて居ないたつて、先刻から、ぼんやりしておいでゝではないか。」

「わたし、少し頭痛がいたしますの。」

「風邪をひいたのぢや無いかえ？　烏犀角でも飲んで、早くおやすみがいゝ。」

「えゝ。」と、お七は生返事をしたが、また氣を取直したといふやうに、せつせと針の手を動かしはじめた。

しかし、その針の手は、またいつの間にかお留守になり、お七は、又しても、はてない思ひに

引き入られる。而して、長い睫毛の蔭の二つの瞳は、まざ〳〵とその戀しい人の幻を描き出すのである。

「お七。」

重ねてから呼び懸けた時、母親は、針仕事を膝の上から掻きのけて、すこしからだをお七の方へ向きかへるやうにしてゐた。

「何ですの？　お母さん。」お七は、慴えるやうな眼つきをした。

「お前、何か考へごとをしてゐるね。何か思ひあまつたことでもあつたら、お母さんに話しておくれで無いか？」

お七は、ぎくりとしたが、强情にその狼狽を押隱した。而して、しづかな調子で云つた。

「わたし、何も考へてなど居はしませんわ。でも、何も考へることなんか無いんですけど、何だか心細い、たよりない氣がしてならないのよ。かうしてゐても、いつどうなるか知れないつて氣がして、何だかへんにかなしくなつて來るのよ。」

「どうしてだらうね。」

母親は、心配さうな顏をして、もう一度じつとお七の顏を見た。お七はその母の眼がまばゆかつた。そして、我にもなく頰の火照るのを感じながら、深くうなじを落したが、

「わたし、おつかさん、少し休ませていたゞきますわ。何だかひどく頭痛して來ましたから。」

さう云ひ捨てるなり、お七は逃げるやうに座を立つた。

裏二階の、そこが自分の部屋と決められてゐる四疊半に戾ると、お七は、壁に身をよせかけるやうに、兩足を橫に崩してぞんざいに坐つた。而して、長い袂を兩手にとつて、たがひ違ひに膝の上に投げ出すと、ふりをこぼれる長襦袢の紅のいろにじつと見入りながら、細い肩を搖りあげるやうにして、もう一つ、ほつと溜息をついたのである。

お七はふと、母から聞いた振袖火事の傳說を——傳說といふには未だ餘りになまなましい、母自らその眼で見て來たといふ、怖ろしい因緣話を思ひ浮べた。その梅野といふ娘もその時、今の自分と同じ年の十六であつたといふ。母に伴れられて、菩提寺の本妙寺に參詣した歸り道を、淺

草の觀音樣に廻るつもりで、上野の山下まで來かゝると、通り魔のやうに摺れ違つて山內の方へ」うしろ姿を消した美しい小姓があつた。娘は一目見てすつかり心を奪はれて了つた。何處の何人とも知らぬ人を、心も空にあこがれ渡つては、そのお小姓の着てゐたと同じ振袖を作らせて、せめてもの心やりにと、朝な夕なに搔き抱いてゐたが、とうとう戀わづらひの枕があがらなくなりあくる年の春十七を一期として、こがれ死に死んでしまつた。紫ちりめんの畝織に菊の模樣を散らし、桔梗の縫紋を置いたその振袖は、こがれ死に死んだ娘の柩衣となつて寺に納められたが、それが古着屋の手に渡ると、あくる年の、その娘の死んだと同じ月の同じ日に、もう一人の娘の柩の覆ひとなつて、再び寺に戾つて來た。寺では再び古着屋の手に渡したが、すると又そのあくる年の同じ月同じ日に、同じやうに若い娘の柩を包んで三度寺に戾つて來たので、あまりに事の不思議さに驚いた本妙寺の住職は、惡因緣の根を絕たうと、件の三人の娘の親々を施主にして寺內に大施餓鬼を執り行ひ、庭火に投げ入れて、その振袖を燒かうとする折しも、一陣の龍卷北の空から舞ひくだり、火のついた振袖を大空高く吹きあぐるよと見るみる、火は寺の棟に燃え

うつり、やがて四方に燃えひろがつて、二日二夜燃えつゞけ、都のあらましを燒野の原として、數知れぬ死人を出したといふのである。

而して、その振袖の主なる小姓は、とう〳〵何處の何人とも知れずじまひであつたといふことであるが、お七は今、自分の思ふ人を、その不思議な小姓に思ひ合せて見たのである。自分もまたその娘達のやうに、不思議な妖魔にみいられて、かくまでも惱ましく思ひこがれるのでは無からうか？　ふと、そんな事を考へて、お七は我にもなく胸をおのゝかしたのだつた。

だが、それは勿論、愚かな妄想に違ひ無かつた。――山田左兵衞樣とたしかに名前まで聞いてある。百人一首の歌のやうな、夢ばかりなる手枕の、うつゝともない契りでこそあれ、お七はその人故に處女を捨てたのである。去年の暮、おしつまつてからの火に燒け出されて、旦那寺の圓乘寺に立ち退いた折に、お七はそこではしなくもその人を見た。そしてその人の、黑い瞳の中に、お七は運命の深淵を見たのである。どちらが誘うたといふのでもなく、本堂の隅のうすくらがりに戰き乍ら相抱いた時、

「わたしは長老樣が怖い。」とお七が云へば、

「わたしも長老樣が怖い。」とその人も云つた。

その人のうるみ燃えるまなざし、その人のあつい息を交へたさゝやき、兵部卿の匂ひゆかしいその人の袖のうつり香――それ等の一つ一つを、眼に、耳に、全官能に思ひ浮べながら、お七は二つの袂でじつと胸を抱きしめるやうにして、かぼそい肩をゆすつて、更にもう一つほつと長い溜息をついた。お七は、身をも心をもてあますほど、物なやましいのである。やるせが無いのである。

お七は、ふと思ひついたやうに、手習机の前に坐つた。手文庫のひきだしから、卷紙を出してそれを机の前にひろげると、左の手で袖屛風をして、前髮を押しあてるやうにして手紙を書き始めた。

書いては破り、破いては書いて、どうやら書きあげた封じ文をふところに入れて、上からそつと抑へるやうにして立上つたお七は、窓の戸を細目にあけて、たそがれ行く町の姿をぼんやりと

眺め入つた。雪になるらしい空合である。向うの四つ角の火の見櫓に烏が二三羽とまつてゐる。口笛の音がした。お七は眼を落した。眼の下に、——隣の質屋の黑塀との間の、細い路地の曲り角のところに、此方を見あげながら合圖の口笛を吹いてゐる吉三の姿をみとめると、お七は、はつと胸ををどらした。而して、そのすばしこい眼を一寸あたりにくばると同時に、ひらりと身を輕く、足音をしのばせて二階から階下へと降りて行つた。

圓乘寺に居る左兵衛とお七とのとりかはす戀文の媒は吉三がしてゐた。吉三は、今年十九になるが、早くから身を持ちくづして、小ばくちなどに身過ぎをしてゐる當時の不良少年の一人であつた。

表店の方は、今が忙しい盛りの日ぐれ時のどさくさに紛れて、そつと裏木戸から忍んで出たお七へ、左兵衛からの手紙を手渡しながら、吉三は首をすくめて、

「へ、へ。」と妙な笑ひ方をした。而して、

「今日は、うつかり長老様に見つかつて、小つぴどく叱れて來やした。お孃さん、戀の使ひもな

かなからくぢやありませんぜ。」

さう云つて、吉三は、いやらしい眼で、お七の少し赧くなつた頬をみつめながら、

「へ、へ、へ。」と、再び無氣味な笑ひ聲を立てたのであつた。

二、吉三

左兵衛からの手紙をお七に渡し、お七から左兵衛への手紙を受取つた吉三は、潮騒のやうな夕轟きをうつすりと靄が罩めて、もうちらちらと灯のともりはじめた町を、ふところ手の肩を少し右あがりに、ふら〳〵とあるいて行つた。

吉三の右の手は、ふところの中で、しつかりとお七の手紙を握つてゐた。吉三は、時々、歩みを停めて、その手紙をふところから出して見た。而して、にやりと笑ふと、それを鼻先に押しあてた。さつきまで、お七のふところに秘められてゐた手紙には、未だなまめかしい肌のうつり香が殘つてゐる。吉三は、眼を細くして、むさぼるやうにそれを嗅ぎしめる。而して、「えへ、えへ！」

と、無氣味な聲で笑ふのである。

やがて、人通りの少ない横町に反れると、吉三は、その手紙の封を切つた。吉三は、覺束無いながら、文字を讀むことが出來る。吉三は、たそがれの薄明りに透かすやうにして、十六の娘にしてはおとなびた美しい水莖の痕を辿りながら、その文字の一つ一つをじつと嚙み締めるやうにする。「戀しく戀しく。」「おん慕はしくおんなつかしく。」――疊句のやうに、殆ど一行毎にくりかへされてゐるさうした言葉にぶつかる度に、吉三は、一寸首をすくめて肩をゆすつて、にやりと狡さうに笑ふのである。狡さうな、卑しい笑ひ方である。が、その笑ひの消えたあとの吉三の眼には、恍惚としてあこがれわたるやうな、夢見るやうな表情が動く。その眼の前には美しいお七の姿が、はつきりと描き出されてゐるのである。吉三は、お七の手紙をにぎりしめたまゝ、道のなかに立ちとまつて、空を仰ぐやうにして、ほつと溜息を吐く――。

お掃除町の、とある横町の、だら〳〵と坂になつた細い路を突きあたつて横にきれたところに、吉三の友達の源次の家がある。源次は吉三より五つ年上で、今年二十四である。れつきとしたお

旗本の息子に生れながら、放蕩の爲めに親に勘當されて、十も年の違ふ情婦と一緒に――その賣色あがりの、表向は三味線の師匠の看板を出してゐるが、内實は何をしてゐるか判らないやうな女にやしなはれて、のらりくらりと暮らしてゐる。吉三とはばくち仲間でもあれば、遊蕩仲間でもある、惡い事にかけてはひけをとらない、天下晴れてのならず者であつた。

「源あにい。ゐるかい？」

吉三は、格子の前に立つと、一寸聲をしのばしてから呼んで見た。

「吉か？　へいりな。」

吉三がはひると、源次は行火をかゝへ込んで、一人でぽつねんとしてゐた。三四日風邪氣だと云つて、さかいきをのばして、冴えない顏色に、眼ばかりきら〳〵と光らしてゐる。

「ねえさんは留守かい？」

「うん。」

又、女と喧嘩でもしたのであらう。源次は今夜ひどく不機嫌である。

吉三は、一寸出端をくぢかれた態で、少しの間もぢ〳〵してゐたが、やがてふところからお七の手紙を出すと、にや〳〵笑ひながら、それを源次の前に置いて、

「見てくんな。あにい。――さうしてまた、何とか一つうめえ文句で返事を書いて呉んな。」

源次は、ものうさうな手付で、その手紙をとりあげたが、讀んでゆくうちに、源次の顏にも、ある興味を刺戟されたらしい、活々とした表情が浮んで來た。讀んでしまふと、源次は、

「うふふ!」と、嘲るやうに笑つた。

「あにい、又、何とか書いてくんな。」

「面白えな。すつかりのぼせてやがる。――だが、かうなると少し罪な氣もするな。」

源次は行火の上にひろげたまゝの手紙を顎でしやくるやうにして、暫くにや〳〵してゐたが、ふと、何事をか思ひついたやうに、きらりと眼を輝かしながら、

「罪は罪だが、かうなると事が面白くなるて。ところでどうだ? 吉!」

「何だい、源兄い!」

「いつその事、娘をおびき出して、こつちのものにしちまはうぢやあ無えか?」

「おびき出す?」

「さうよ。」と、源次は顎を撫でた。

「こつちのものにするつて、どうするんだい?」

「それを聞く馬鹿があるか? 手前も、それほど惚れてる女なら、何も遠くで指を啣へてゐるにも當るめえ。」

「そんな事が、兄い――。」と吉三は、慌てて揉み消すやうに云つた。

「第一、こゝまで事を運んでしまつて、このまんまぢやあ引つ込みが附か無えや。」

「だが、あにい。そんな事が出來るだらうか?」

「出來なくてどうする?」

大きな眼をぎろりと剝いて、勢込んだ調子で斯う云ふ源次を見ると、吉三は我にもなくうろたへるのである。――吉三はお七を戀してゐる。けれども、吉三のお七に對する戀の仕方は、外